イノセンス

イツキ_6023

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

剣と魔法のある世界。

かつて勇者が巨悪を討ち、平和になった大国で過ごす主人公たちが、再び訪れる厄災に立ち向かい討ち滅ぼすまでの旅を描く物語。

多種多様で強力な魔法や人間離れした身体能力での戦闘よりも、やや現実に重きを置いて書いていこうと思います。

残酷だったり、救いがなかったり、胸糞悪い話も書くかもしれませんが、それを乗り越えて成長する若者をテーマに書いていければなぁ、と思っています。

なお、本作は数年前に筆者がＳＳとして掲示板に投稿した以下の物語をもう一度設定

やらなんやらを妄想して書き直したものになります。
エレファント速報様：ｈｔｔｐ：／／ｅｌｅｐｈａｎｔ．２ｃｈｂｌｏｇ．ｊｐ／ａｒｃｈｉｖｅｓ／５２１３５７２７．ｈｔｍｌ
※他のＷｅｂ小説サイトにも投稿しています。

目次

序章　平和
1　出会い①　1
2　出会い②　19
3　出会い③　37
4　風を操りし者たち①　84
5　風を操りし者たち②　98
6　風を操りし者たち③　116
7　風を操りし者たち④　133

序章　平和

1　―　出会い①

戦火の中を一人の少年が歩いている。
全身黒の軽装鎧、頭は黒のフードで覆われ、表情は見えない。
左手に片刃の剣を携え、燃え盛る建造物と道に転がる死体の中をただ歩いている。
目の前に幼い少女が佇んでいた。
頬には何重にも涙の跡があったが、今は泣いていない。
泣きつかれたのか、流す涙も尽き果てたのか。
生者なのか疑わしいような虚ろな目で、ただ燃え盛る街を見つめている。
少女は少年の姿に気づいて、視線を向けた。
少年が一歩一歩距離を詰める、だが少女に逃げる素振りはない。
手を伸ばせば届く距離、少女は悟ったように目を閉じて、膝から崩れた。
少年は両手で剣を持ち直し、足元に跪いた少女の首めがけ、刃を振り下ろした。

「はっ!!」

シルフは目覚めると同時に身体を跳ね上げ、枕元の剣を掴むと半身まで刃を抜いた。

ベッドの軋む音、毛布の感触、全身の汗が部屋の冷気に晒され、身体が急速に冷える感覚で、我を取り戻した。

まだ呼吸が乱れていたため、二、三度深呼吸をして、剣を鞘に収めて脇へ置いた。

いつもは起床のラッパで目覚めるが、ずいぶんと早く目覚めたのか、部屋は窓から入る僅かな日差しでうっすらと見える程度だ。

シルフは黒髪を掻き上げて、目をつむって項垂れる。

汗をかいた頭髪に指が入って頭まで冷えたおかげで、思考も冷静になった。

「久々に嫌な夢を見た、な…」

二度寝できる気はしなかったので、ベッドから降りて日課のウォームアップを行うことにした。

麻のシャツを脱ぎ、上半身裸になると、目の前の姿見鏡を一瞥する。

左肩から胸元まで刻まれたトライバルタトゥーと傷跡だかけの身体、細身ではあるが無駄な贅肉のない鍛え上げられた身体が映っている。

全身の腱を伸ばし終えたら、そのまま片手で逆立ちになり、ゆっくりと体重を落とし、

戻す。
ただ、その動作も三カウント目を終えたところで、ノックの音に邪魔をされてしまった。
木製の戸を叩く音、素手で叩いたものにしては響くので、相手は金属製の籠手をしていると分かった。
となれば、宿舎を警備している兵士のものだろうと察しがついた。
いくらなんでも上半身裸で出迎えるわけにはいかないので、シャツを羽織り直し、ボタンを掛け、ゆっくりと扉を開けた。
開けた先にはシルフより頭二つ分の背丈があろうかという屈強な兵士が二名、シルフを前にした途端に直立不動の敬礼をしてみせた。
「シルフ隊長!!早朝より大変失礼致します!!」
「おはようございますッス!シルフ隊長!」
「これは、ヘルベルト殿、マーディン殿、夜勤の努めお疲れ様です。
如何されましたか?」
壮年で短髪の男をヘルベルト、まだ二十歳そこそこの癖毛の青年がマーディンである。
シルフは二人に向かって丁寧に会釈し、笑顔を向ける。

こと上限関係、序列の徹底されている王国の正規軍において、シルフのこの丁寧な対応はなかなか有名だった。

魔法剣技部隊、通称「レンジャー」の少数精鋭をまとめ上げる隊長であり、国王に重宝されている身でありながら彼はどんな相手だろうと徹底して礼儀を尽くす。

下士官だろうが、新兵だろうが、傭兵だろうが、である。

この親しみやすさは特に若い兵士に好評だった。

もちろん疎ましく思う者もいる。

国王直轄の騎士団の中で、貴族の出自の者などが特にそうだが、態度というより、彼がこの国に来た経緯と役職に対する嫉妬と言える。

とは言っても、彼の実力は認めざるを得ないため、面と向かって突っかかるような輩は現在はいないのだ。

ヘルベルトが苦笑いを浮かべ、鼻先を掻きながら答える。

「いやぁ…、それが王女様がこの宿舎に参られまして、シルフ隊長に逢いたいと…」

「俺感動しました！　こんな近くで王女様にお会いできるなんて！」

話の腰を折られたヘルベルトがマーディンの頭をコツいた。

大して力など入っていないが、金属で保護された指の関節で小突かれたので、それなりに痛そうだ。

シルフはすぐに合点がいった様子で、壁に立てかけてあった厚手のローブを羽織って部屋を出た。

ヘルベルトとマーディンもあとに続く。

―――

宿舎の食堂はちょっとした騒ぎになっていた。

朝の暇にカードゲームを楽しんでいた兵士などは大慌てで賭けに積み上げていた小銭を片付けていたし、食房で朝食の仕込み作業していた兵士も手を止めて配給を行うカウンターの前に整列している。

そんな周りの反応などお構いなしに、少女は満面の笑みで周囲の兵士にじゃれついていた。

ヘルト連合王国王女　ソフィア・プリスタイン、まだ五歳の幼子には自身の立場を理解するには早すぎるようだ。

その状況にどう対応していいのやら困り果てた付き人の侍女があたふたと王女の後ろついて回っては、兵士に頭を下げている。

侍女にとっても兵士の宿舎に来るなど初めてのことなのだ。

「姫様」
ヘルベルトとマーディンを連れたシルフが食堂に入ると同時に声を掛ける。
その声に即座に反応したソフィアは歓声を上げながらシルフに抱きついた。
「シルフおはよう！　会いたかった！」
「おはようございます、姫様。
…姫様、無闇に走ってはいけないと、女王陛下よりお教え頂いたはずですよ」
「う…、だって…、早く会いたかったから…」
シルフはソフィアの目線まで腰を落として、彼女の両手を優しく握った。
笑顔は崩していないが、まっすぐにソフィアの目を見据える。
彼女はバツが悪そうに視線を泳がせる、これは彼のお説教モードなのだ。
「姫様、なぜお城ではなくこちらへいらしたのですか？
給仕の方々に無理を言って、連れてきて頂いたのではないでしょうか？
姫様の我儘で、皆様にご迷惑を掛けてはなりません」
「…うん」
「両陛下がご不在でお寂しいのはわかります。
しかし、姫様に何かあった時に責任を取らなければならないのは、ここにいる方々なのです。

ご自分の御立場を弁えて頂かなくては困ります」

「う…うぅ…ご、ごめん…なさい」

長いプラチナブロンドの睫毛の大きな碧眼から大粒の涙が込み上げて頬を伝っていく。

しゃくりあげながら肩を震わせるソフィアも見て、シルフは彼女の肩を抱き寄せた。

〝やれやれ〟と軽くため息をつきながら、頭をなで、背中をさする。

こうなってしまっては、これ以上叱ることはできない。シルフもソフィアの涙には弱かった。

いよいよ本格的に泣き出してしまったソフィアを抱き上げて、周りの兵士達に軽く会釈する。

事の顛末を見守っていた彼らもそれぞれ持ち場に戻り、ちょっとした早朝のドタバタは幕を閉じた。

ソフィアを抱きかかえたまま、シルフは侍女へ頭を下げた。

「ご迷惑をお掛けしました。

姫様は私がお城までお連れしますので、どうぞ仕事にお戻り下さい」

「は、はい…。

あの、僭越ながら…、あまり王女様を怒らないであげて下さい…。

シルフ様にお会いするのは楽しみにしてらしたので…」
「ええ、私も姫様に嫌われたくありませんから。
それよりも、少し姫様と散歩にでようかと思いまして。
外は寒いので、そちらの羽織ものを着せたいのですが」
「あ、はい。
王女様、さぁ、こちらのお召し物を」
ソフィアを一度床に立たせて、美しい白狼の毛皮の外套をソフィアに着せる。
首元までファーが覆うので、非常に暖かそうだ。
「我儘言って、ごめんなさい…」
胸元のボタンを締める侍女に向かって、ポツリとソフィアが呟いた。
涙で濡れた瞳で、必死に許しを請うような表情に一瞬驚いた侍女だが、すぐに慈愛に満ちた笑顔で応えた。
「滅相もございません、王女様」
「姫様、よくご自分から謝ることができましたね。
シルフは誇りに思います」
「…うん」
ソフィアは照れくさそうに顔をフードで隠すと、シルフの首に両手を巻き付けて抱っ

こをねだった。
「それでは」と宿舎から出ようとするシルフにヘルベルトとマーディンが声を掛ける。
「あ、お待ち下さいシルフ隊長」
「部屋に剣を忘れてますよ！　勝手に触っちゃってすみません！」
マーディンが大事そうに両手に抱えた剣を差し出してきた。
長さは一般的な両刃の片手剣と同様の長さであるが、細身の湾曲した刀身を収めるため木製の鞘も曲線を描いている。
柄頭と十字鍔に金色の装飾が施されているが、それ以外は黒一色だ。
グリップに巻いてある革が手垢で変色している以外は不自然なほど美しい外観をしていた。
「申し訳ありません。
それは私の部屋に置いておいて頂けますか」
「えぇ？　い、いいんですか？」
「姫様が怖がるんですよ、それを身に着けていると」
「は、はぁ…」
「それに、その剣には呪いが掛かっているので、あまり触らないほうがいいですよ」
「いいッ!?」

「冗談です」とクツクツ笑いながら「それでは」とまた一言残して、ソフィアを抱きかかえたシルフは宿舎を出ていった。
「はっはっはっ、誂われちまったなぁ、マーディン？」
「いや、なんつーか、シルフ隊長ってすげー良い人なんスけど、掴みどころがないっていうか…。
　あの人って、この国の人なんですか？」
「あん？　おまえ知らねーのか？」
「いや、俺より年下に見えるのに、一個部隊の隊長なんてすげーなぁ、て思ってましたけど…」
「あの人は外から来た人だよ、俺らと同じさ。
　あの人はな…」
　　――――女王陛下と王女様の命を救った人だ

――――

　ヘルト連合王国は大きく三つの地区に分かれている。
　広大な湖の中心にある小島に、王城、貴族階級の住居・宿泊施設を備える最も狭い地

域を「ムート区」。

職人、商人、教会関係者の住居の他、庁舎、各種ギルドホールなど、交易・都市機能の中心となる埋め立てられた地域を「クラフト区」。

クラフト区から東西南北に伸びる長い四つの橋から先、湖畔を造成した一般的な労働階級の人間が住む最も広い地域を「リーベ区」と呼ばれ、いずれの地区も砲撃に耐えられる厚い外壁で囲まれている。

王都の市民はクラフト区とリーベ区の行き来は自由であるが、ムート区への立ち入りは原則できず、往来する外部の人間は各地区に入る前に税を支払う必要がある。

湖から小高い山を挟んで流れる河川より先はすぐに海へ通じており、貿易港と軍港を備え、陸路以外の大量の物資輸送を可能にし、多種多様な物品、文化が行き交う交易都市とも言える。

シルフはソフィアも抱き抱えながらムート区の遊歩道を歩いていた。

立ち並ぶブナの木は紅葉の絶頂期なら美しい黄金色や茜色になるが、本格的な冬の到来が近づいているせいか、葉は散りはじめてしまっている。

早朝のせいか、行き違うのは礼拝の行き帰りの僧侶が多く、シルフの事を知るものは立ち止まり手を合わせて深々とお辞儀をした。

中にはソフィアの存在に驚くものもいたが、まぁ、シルフがそばにいるのなら、と騒

ぎ立てることもなかった。
「おお、シルフか」
「これは、アルド老師様、おはようございます」
紺色のローブを着たやや恰幅のいい初老の男が、たっぷりと蓄えた顎髭を撫で付けながらシルフ達に声を掛けてきた。
ヘルト連合王国常備軍の兵科の一つ「魔闘士」を束ねる武官の一人、アルド・ハバーだ。
「ああ、おはよう。
ところで…、抱き抱えておるのは姫様かな?」
「ええ、まぁ、ちょっと一悶着ありまして。
こうしていたら、また眠ってしまいました」
「うんうん、寝子は育つというしのぉ。
いやぁ、女王の幼い時を思い出す…、かわいい寝顔じゃ。
ますます孫に会いたくなったわい」
「魔闘士部隊の士官の皆さんは今日から休暇に入られるはずですが、アルド老師様もご自宅に戻られるのですか?」
「ああ、娘も婿殿も一緒にな、ほれ」

アルドの視線の先に、連れ立って歩く男女がこちらへ手を振っているのが見えた。
白を基調としたダルマティカに上からカズラとストラに身を包んだ女性神官をルイーサ・ハバー、チェニックの上から毛皮のコートを羽織った男をエドゼル・ハバーという。
「やあ、シルフ君。朝から姫様のお守りかい？
宿舎に寄った時に聞いたよ、君が姫様を泣かせたってね？」
エドゼルがニタリと笑いながら茶化すようにシルフに詰め寄った。
「ハバー中尉…、それにはやや語弊があります…」
「はっはっは！　わかってるよ、でも事実だろう？
それより、肩書で呼ぶのはよしてくれ、休みの日ぐらい仕事は忘れたい。
エドゼルで構わないよ」
「は、はぁ…」
「あなた、シルフ様が困っているでしょう、お戯れが過・ぎ・ま・す・よ」
エドゼルの隣にいたルイーサが彼の背中をつねりあげる。
「いぐぅッ!?　わかったわかった！悪かったよ！
しかし、こんな朝早くに姫様を城からだすなんて、女王陛下もよく許したね」
「いえ、両陛下は同盟のご領主様へ冬至の挨拶に行かれているのです」

シルフの言葉に「なるほどね」とエドゼルは合点がいったようだった。
そして、そんな事も把握していなかったエドゼルの脇腹を妻のルイーサがつねりあげた。
「それで寂しくてシルフ様に会いにに行ってしまったのですね」
ルイーサがシルフの腕の中で眠るソフィアを慈しむ笑顔で髪を撫でた。
その話を聞いていたアルドが「はて」と思った疑問をシルフに問いた。
「王族の外出はいつもお主が護衛を務めておっただろう」
「ええ、まぁ、そうなんですが…。
私の部隊の年長者から…」

――隊長、両陛下の護衛は我らが同行いたします！
――そうです！　隊長、たまには休んで下さいよ！
――我ら四人もいれば、隊長の代わりにもなりましょう！
――てゆーか、隊長はいつ寝てるんですか!?　倒れたら私達が困るんですけど!!

「などと言われまして、国王に進言したところ、問題なし…とのことで…」
「ふむ、フェンリル一族に騎士に魔闘士、それにお前の部下が四人、何も問題ないではな

いか！　はっはっは！」
「良い部下を待ちましたね、シルフ様」
「ええ、みんないい子たちです。
…ただ、騎士の方々とうまくやってくれればいいのですが」

複雑な表情で視線を落としたシルフにエドゼルが引きしめた表情で口を開いた。

「子離れできない親にしびれを切らして、子が巣立とうとしてるんだ。
シルフ君、君の底抜けの優しさは良いところだけど、最大の弱点でもある」
「ちょっと、あなた…」
「シルフ君、僕は君をこの国で最強の剣士だと思ってる。
家柄だとか、口先だけの騎士道精神に陶酔している騎士団なんか目じゃないさ。
だから、魔闘士から独立させた魔法剣技部隊を君に任せたんだ。
それをいつまでも籠の中の鳥にしておくのは困るよ」
「面目ありません…」
「おっと、自分から仕事のことは忘れたいといっておきながら…、悪かったねシルフ君。
大丈夫、君は僕の自慢の部下だ。　君の部隊のこともちゃんと評価しているよ」

上司と部下のちょっとした諍い、というには上司の一方的な説教にルイーサは自分の夫の性格にため息がでたが、まぁ、仕事になると熱心になるところに惚れているという自覚があるので目をつむることにした。

それよりも、ルイーサはある提案をしてみることにした。

「シルフ様、もし宜しければ姫様と一緒に私達の家に来ませんか？

私達の娘は姫様と同い年なの、きっと仲良くなれると思いますの」

「それはよい！　聞けシルフよ！

さすが我が孫じゃ、もう魔法に興味を示しておる！

幼児向けの魔法文学書をたんまり買ってやるつもりじゃ、喜ぶかのぉ」

「使用人からも手紙が来ていてね、もう三ヶ月も帰れていないから、やはり寂しがっているみたいなんだ。

姫様となら、良き友になれるんじゃないかな」

三人から矢継ぎ早に言われて、あっけにとられるシルフだが、腕の中で眠るソフィアを見て、この話を聞けばさぞ喜ぶだろうと想像し、思わず心が高鳴った。

だが、無断で王女を連れ出すことにはやはり戸惑いもある。
そんなシルフの様子を見抜いたアルドがシルフの肩をパシリと叩いて見せた。

「心配せずともよいぞ！
王にはワシから弁明してやる！　心配するな！」
「国王陛下は問題ないかと、問題は女王陛下がなんと仰るか…」
「あら、女王陛下でしたら私からお話しますわよ。
元同期ですもの、うふふ」
「はぁ…それはとても心強いです」
「決まりだね、準備を整えて午前中に出よう。
うちで少しゆっくりして、クラフト区の市場に出かけよう！」

「…みんな、市場にいくの？」

目を覚ましたソフィアは、まだ覚めぬ目をこすりながら、一同を見回し問いかけた。

「ねぇ、シルフ、みんな市場にいくの？」

「ええ姫様、ここにいる皆様と一緒に、市場へ行くのですよ」
シルフの言葉に隠せない喜びと興奮がソフィアの表情に現れる。
キラキラと輝く宝石のような目をしながら、するりとシルフの腕の中から飛び出て体全体で喜びを表現するように走り出した。

「やった!!　やったぁ!!　ねえシルフ!!　早く行こう!　すぐに行こう!!」
「姫様ッ、そのように走ってはなりません!」

シルフの警告は一歩遅かったようで、外套の裾を踏んでしまったソフィアは仰向けで芝生に倒れ込んだ。
石畳に頭を打たなかったことに安堵しながら、シルフが駆け寄ったが、彼女はキャーキャーとはしゃいで聞かなかった。

2　―　出会い②

魔闘士とは主に破壊魔法を駆使し、敵を討つことに重きを置いた兵科である。
鉄砲や大砲が普及しつつあるこの世界に置いても、歩兵の後方から強力な魔法攻撃の支援を行える戦の要となる部隊だ。
同盟を結んだ各国の貴族階級の人間を主体に構成され、武系貴族が支持母体となる連合騎士がこの国の花形であるが、魔法の才さえあれば出世ができること、破壊魔法以外の変性・付呪・魔法薬学といったこの国を支える魔法科学分野へ転身が容易であり、それを支える大商人や魔導系貴族の後ろ盾を持っていることから、騎士団以上の権威があると言われている。
魔法剣技部隊、通称「レンジャー」はエドゼル・ハバーの提唱で魔闘士部隊から枝分かれした新設部隊である。
本来専業である武と魔法の両方を駆使し、単騎でのあらゆる作戦行動を行えるだけの技量を持つ兵士を育成するという着想で立ち上げられたが、その具体的な兵士像というのはエドゼル自身もシルフに出会うまではっきりしなかった。
風属性の魔法を操り、常人離れした剣技で相手を圧倒する姿から「風神」の異名を轟

かせた男に、エドゼルは惚れ込んだのである。
そんな大役を任された彼は、目下のところ、隊の資金繰りやスポンサー集めに奔走しているのが現状であるが…。

時刻は午前、城門の前で先に待っていたシルフとソフィアは門番のヘルベルトとマーディンに事情を説明していた。

「そういう訳で、本日、姫様はアルド老師のお誘いで一緒にクラフト区の市場まで足を運びますので、私も同行致します。
終課の鐘が鳴るまでには戻りますが、何かありましたらレンジャー隊長補佐エアンストまでお知らせ下さい」
「はっ。承りました。
我らは午前で交代ですが、後続のものに引き継ぎ致します。
どうぞ道中お気をつけて」
「王女様、楽しんできて下さいッス！」
「うん！　楽しみ！」

一足遅れて、アルド、ルイーサ、エドゼルの三人が城門まで駆けつけた。

「おおシルフよ、遅れてすまんな！」

「もうっ！　お父様ったら!!　あれだけ準備を整えておいてと言っていましたのに！」

「まぁまぁ、いいじゃないか、時間はたっぷりあるんだから」

「けっけ、敬礼！」

ヘルベルトとマーディンが慌てて敬礼をした。

一般兵の彼らには騎士団も魔闘士も、シルフを除けば、かなり近寄りがたい存在なのである。

それが、魔闘士の士官ともなれば尚更だった。

常日頃、一般兵科、騎士団、魔闘士の確執を憂いているアルドはため息混じりに二人の肩を叩いた。

「よいよい、かしこまるな。

わしらは暇をもらう立場じゃからな。　努めご苦労じゃ」

「は、はっ！　ありがとうございます！」
「光栄の至りでございまス!!」
「まぁ、固くならないで、僕ら王室の人間じゃないよ？」

　意味不明な返事をしたマーディンにツッコミを入れるエドゼルの背後からソフィアが顔を出すと、マーディンの手の甲に傷があるのを見つけた
　いそいそと前に出ると、両手で抱き込むように握った。

「お手て、怪我してるよ？」
「お、王女様!!　俺の手なんか触っちゃだめッスよ！　汚いッス！」
「汚くなんかないよ！　みんなお城を守ってくれる働き者なんだって、お母様が言ってたよ!!
　だから汚くなんか、ないよ？」
「え…？」

　ソフィアの言葉に周囲が〝はっ〟と静まり返った。
　民を想うのが仮にも人の上に立つ人間に必要な素質であるならば、この幼い姫君には

十分に備わっているのだと今の言葉から十分に理解できる。
それを直球でぶつけられたマーディンは熱い感情が込み上げてきたのか、感涙に頬を濡らすのだった。

「え？え？　痛かった!?」
「痛く無いッス!!　俺は…俺は…王女様のおかげで不死身になったッス!!」

大の男の涙に狼狽えたソフィアだが、そういえば遊んで怪我をして泣いている自分にシルフがしてくれた「おまじないの言葉」を思い出し、目をつむりながら思い切り叫んだ

「えーい！　痛いの痛いのとんでけー!!」

再びあっけに取られる周囲などお構いなしに満足げなソフィアはマーディンを見上げながらはつらつとしている。

「ね？　これでもう痛くないよ！」

「は、はい！　ありがとうございますッス！　王女様!!」

こうしてヘルベルトとマーディンは家路につく一行の姿を見送った。

「マーディン、お前よぉ、泣くやつがあるかよ」
「だって俺感動したんスもん！　なんて良いお方なんだ…王女様…」
「まぁな…、俺は売り飛ばされてこの国に来た人間だから、なおさら思う。
ここはいい国だ、女房も貰えたし、娘を授かった」
「あ、ヘルベルト先輩…、すんません、俺、知らなくて…」
「別に気にすんなよ。
元奴隷の人間なんてこの国じゃ珍しくねぇ、むしろこの国に導いてくれたことを女神ネイト様に感謝しなくちゃな。
…それより、お前の手の怪我、あとで医務室で見てもらえよ、雑菌が入ったら面倒だぞ」
「ああ！　大したことねぇっすよ！　こんなもの唾つけとけば治る…!?」
ふと自分の手の甲を見たマーディンは先程まであった擦り傷が跡もなく綺麗に治癒していることに気がついた。

それどころか、夜勤明けの身体が軽くなっているし、眠気もない、そして猛烈に腹が減った。
まるで身体を回復するための栄養補給を必死に訴えているようだった。

「ヘルベルト先輩！　仕事終わったら飯いきましょう！」
「おお…別に構わねぇが、急にどうした？」
「とにかく腹が減っちまって！　新しく出来たステーキ屋にしましょう！
すげー美味い肉を分厚く出してくれるんスよ!!」
「お、いいねぇ。
いっちょ、精をつけていくか！」
「ういッス!!」

マーディンは強烈な空腹感で、傷のことはさっぱり忘れてしまっていた。
だが、ソフィアがまじないを唱えた瞬間に起きたことはシルフたち魔法を生業にする者にははっきり分かった。
魔法の根源〝マナ〟の躍動、聖職者が長い修練の末に獲得する治癒魔法を彼女はたった五歳という年齢で無意識に放ったのである。

この世界の魔法は〝マナ〟と呼ばれる実体のないエネルギーを根源として存在している。

マナは大気、水、動植物、鉱物、あらゆる物質に干渉し、古くからその利用方法が研究されてきた。

魔法を使役する者は己の体内にあるマナを消費し、神秘の力を発揮することができるのである。

蓄えられるマナの量、一度に使役できるマナの量、マナによって発揮できる力の種類と影響力を総合したものが「魔力」であり、魔力の高い魔法使いほど優れているとされてきた。

「魔闘士」を例えに出せば、どれだけ強力な破壊魔法をどれだけ短時間に発動でき、どれだけ長時間使役できるのかを考えれば分かりやすい。

当然だが、魔法を使役し、それを業とする者は少数であり、大半の人間は魔法が使えない、あるいは使えても業として役に立たない、まして興味もない者が圧倒的である。

それらの大多数の人間にも魔法の恩恵を得ることができ、引いては社会の発展に貢献

するために魔法工学と呼ばれる学問が生まれ、マナを含む物質を資源として活用し、生活水準を向上させる産業ができた。
　これについてはまたの機会に書きたいと思う。

閑静な邸宅が立ち並ぶ通りにアルド達の自宅があった。
　それほど広い庭ではなかったが、手入れが行き届いており、植えられている多種多様なハーブはルイーサの趣味なのだろうか、香草や薬の原料になるものまで様々だ。
「おーい、誰かいるかの？」
　アルドがやや声を張り上げて人を呼ぶと、邸宅の奥で庭作業をしていたらしい初老の男が早足で近づいてきた。
　シワひとつない燕尾服、シミの一つもない真っ白なシャツ、光沢のある白手袋を完璧に着こなし、スラリとした長身に品があり無駄のない身のこなしをしていた。
「これは大旦那様に旦那様、奥様、おかえりなさいませ。
　おや、お客様ですかな？」
「ああ、僕から紹介しよう。
　我が魔闘士団が誇る魔法剣技隊隊長であり国王の側近であるシルフ君。

アダルハード・プリスタイン国王のご息女ソフィア様だ」
「こ、国王のご息女、これはッ！」
男は驚きの表情とともに、すぐさま片膝を地につける最敬礼を行った。
「遅ればせながら、ハバー家にて執事長を務めるアデル・マイヤーと申します。
何卒、お見知りおき頂きたく存じます」
「ご丁寧なご挨拶痛み入ります。　シルフと申します。
本日はソフィア王女共々、お世話になります。
どうぞお顔を上げて頂けませんか」
「はっ！」
「さぁ、姫様。
はじめてお会いする方にはご挨拶するようお教え頂いたはずですよ」
ソフィアは緊張の面持ちで、一歩前に出る。
別にはじめてのことじゃない。
王室に訪れる貴族にだって何度も挨拶しているのだ、と、呼吸を整えた。

「おっ、おっ、お初にお目にか、掛かります！
ソフィア・プリスタインでしゅ！
ど、ど、どうぞお顔を上げてい、い、頂けませんか!?」
「ははぁッ！」

彼はすでに顔を上げていたし、そしてもっと気楽な挨拶でよかった。
カーテシーで膝が震えてすっ転びそうになったのをシルフがさり気なく支えていた。
律儀に最敬礼のまま頭を下げてくれたアデルはさすが執事長といったところだ。

「驚かせてすまないね。
現在、国王、女王、両陛下とも不在でね。
姫様もずいぶん寂しい思いをされていたみたいで、僕らからお誘いしたんだよ。
シルフ君は留守中に姫様のお側にいたしね、護衛として、客人として来てもらったんだ」
「そういうことじゃ。
夕食を馳走したいからの、準備を進めてくれるかの。

それと、昼は外で摂ろうと思っての、カーリアを呼んでほしいんじゃが」
「お嬢様でしたら自室で読書を…、おや、参られたようですな」

玄関の扉越しでも聞き取れるほどドタバタと音を立てながら、バンと扉を開いて少女が飛び出てきた。

「パパ!!　ママ!!　おじいちゃん!!　おかえり!!」
「おっと、いい子にしてたかい？　カーリア」
「ちょっと身長が伸びたかしらね。　うふふ」
「おおー、変わらず元気がよく安心したぞい」

セミロングの黒髪に金色の瞳、ニカっと笑ったときの八重歯が特徴的で活発そうな少女が飛び跳ねながら三人の帰宅に喜んでいる中、エドゼルが手を指してシルフとソフィアを紹介する。

「さぁ、カーリア、今日はお客様がいらしてるんだ、ご挨拶しなさい」
「お客様？」

少女の双眼がシルフとソフィアに向けられる。
それに気づいたソフィアは「ひっ」と小さい悲鳴を上げて、シルフの後ろに隠れてしまった。
無理もない、ソフィアは同年代の子供と会うのはこれがはじめてのことだ。
シルフは小さいため息をつき、腰にソフィアを纏わりつかせたまま、カーリアの前まで歩み出た。

「カーリア様、お初にお目に掛かります。　私、シルフと申します。
どうぞお見知りおきを」
「わっ」

彼女の前に跪くと、小さな手の甲にそっと口づけた。
この行為にその場にいた男衆の眉間にシワが寄ったが、それはどうでもいい。
ルイーサは頬を赤らめるカーリアに「まぁまぁ」と感心してしまった。
この先、自分の子供の新しい表情を見るたびに同じ感情を抱くのだろう。
挨拶を終えたシルフはいつまでも自分の背中にひっついているソフィアを多少強引

に引きずり出し、カーリアの前に立たせると、「さぁ、姫様」と背中を押した。
　顔を真赤にしたソフィアがもじもじとして目を合わせられない様子をカーリアはポカーンと見つめている。

「あ…あの…、わ、わたしは…、あの…えっと…」

「……っかわいい――!!!」

「はわぁ!?」

　ソフィアよりちょっとだけ背の高いカーリアは頬を赤らめて恥ずかしがる様子の彼女にメラメラと守護欲を掻き立てられたのか、思い切り抱きしめた。

「名前は!?」

「ソッ、ソフィア…」

「シルフ様は姫様って言ってるよ！　どっちで呼べばいい!?」

「ど、どっちでも…」

「じゃあ姫だね！　決定!!

うち、ワンちゃんいるよ！　ワンちゃん好き!?」
「う…うん！　好き!!」

カーリアに手を取られたソフィアはやや引きずられるように屋敷の奥に連れて行かれた。
様子を見守っていたシルフは安堵の表情をしながら呟く。

「杞憂でしたね」
「なにがじゃ？」
「姫様は同い年のお譲様と接する機会がなかったものですから、どうなるかと。
カーリア様には感謝致します」
「いいえ、私達も心配でしたの」
「カーリアも、この家に閉じこもる事が多くてね。
機会は何回かあったのだけれど、家柄が家柄だけに他所の子供の親が遠慮しちゃってね。
決して悪気がないのはわかっていたんだ、でも、親としては複雑だろ？」
「まぁ、家柄が軍属となると、尚更じゃな。

いままで可哀想な想いをさせてしまったわい」
「ああ…、お嬢様に素敵なお友達が出来て…、私めは感動の至でございます…」
アデルは感涙に頬を濡らし、保護者一同は一仕事終えた心地で胸をなでおろした。
しかし、アルドがなにやら含み笑いを浮かべてシルフを肘で突いた。

「シルフよ、先ほど孫に触れたな?」
「ああ、これは失礼を…」
「違うわい。
お前も魔法使いなら分かるであろう、あの子の素質を」
「なるほど…ええ、手に触れた瞬間に、凄まじいマナの脈動を感じました。
それも全体のほんの一片に過ぎないでしょう」
「魔導系の家に生まれた者の宿命と言うのかな。
僕もルイーサも、ちょっと複雑だよ」
「あれほど強大なマナを身に宿していれば、周りが放っておかないでしょう…。
願わくば、普通にお友達を作って、結婚して、幸せになってほしいと思うのが、親の本音ですの。

先程、姫様とお会いした時のあの子の笑顔…、ごめんなさい…ちょっと」

ルイーサはスカートから取り出したハンカチで目頭を拭った。

そんな彼女の肩をエドゼルが抱き寄せる。

そんな二人の姿を見て、シルフは門前でマーディンの傷を癒やしたソフィアを思い浮かべた。

あれも奇跡に近いものだ。

それを幼い王女が行ったとあれば、この国の民衆はさぞ活気だつであろう。

それが良いことなのか、それとも悪いことなのか、しばし考え、国王、女王に報告はするが公にする必要はないという考えに至った。

マーディンにも他言無用と頼んでおかなければならないだろう。

「さて、皆の衆!!

しみったれた話は酒でも飲みながらすればよい!

ひとまず中に入ってくつろぐとしよう」

沈んだ雰囲気を吹き飛ばすようにはつらつとアルドが邸宅の中に入っていった。

いつの間にやら控えていた女中とアデルが全員の荷物を運び始め、この場は一旦お開きになった。

3　―　出会い③

ヘルト連合王国を大変革をもたらしたものが魔法機械だ。

魔法使いが体内のマナを源として魔法を発動するというのは先に説明したが、マナはこの世界のあらゆる物質に普遍的に含まれている。

人の体内にあるマナを魔法として使えるのであれば、マナを含有する物質に魔法の属性（地・水・風・火・光）を与えることができるという考えから生まれた魔法を付呪（エンチャント）といい、これを行える魔法使いを付呪師（ふじゅし）と呼んだ。

付呪された品々はこの世界では古くから魔導器と呼ばれ、魔法使いたちに愛用されており、歴史は長い。

ただし、付呪された呪物が効力を発揮するには使い手に魔力が必要なため、必然的に魔法使いだけが扱えるものとされてきた。

これを魔法使いを介さず、属性をもった呪物、主に付呪された魔法石から神秘の力を人工的な機構を用いて取り出すことに成功したのはヘルト連合王国にあるヘルト魔法大学院魔法工学科のドワーフの研究者達だった。

これに改良を重ねて作り出した魔法機械の中でも空間を冷却する魔法機械はこの国

の食糧事情を激変させた。
比較的長期の保存が可能な穀物類だけでなく、野菜や肉・魚といった生鮮食品までも塩漬け、燻製、乾燥をさせずに年単位の低温保存を可能にしたからだ。
大量の食料を備蓄できるということは、それだけ多くの人間を食わせることができ、一、二年程度の不作があっても飢饉を恐れる必要がなくなったことで急激な国力の向上につながった。
食品の価格は下がり、飲食店は常に豊富なレパートリーを提供でき、庶民は多種多様な食事におおよそ年中ありつくことができるようになったことで、一気に花開いた食文化はこの国への来訪者の増加による外貨獲得と多くの投資家の移住によって強力な経済基盤を作り上げたのである。
この魔法機械は同盟国に輸出されているが、核となる魔法機械の構造は秘匿とされており、消耗品である魔法石もヘルト連合王国で製造されているため、それらも国の重要な収入源となっている。
この技術を持っている上級職人達は特別な優遇とムート区での居住が許されており、人材流出防止にも余念がない。
「何よりも暑い夏に冷えたエールを飲むことができるってぇことは最高だな！」と国民たちは口を揃えて言うのだった。

シルフ、ソフィア、ハバー家一行はムート区の関所を抜けてクラフト区の中央広場へ向かっていた。
身分証を見せられた関所の衛兵はソフィアの存在に大層驚いたが、シルフ達が事情を説明すると快く通した。
関所から歩けばすぐに中央広場があり、ヘルト連合王国の中で最も広い広場となる。
この広場は布告や祭りと様々なイベントに使われるが、そうでない場合は大抵市場が開かれ露天商の場所の取り合いとなる。
日用品、雑貨、家具、アクセサリー、食品、２００平米程度の土地にぎっしりと出店がひしめき合っている。
ここから見える時計塔を備えた教会は待ち合わせの定番だ、商人のための商館、職人のためのギルドホール、庁舎などもこの広場に隣接している。
要はここに来ればなんでも手に入る、この国の台所だ。

「大変人が多い場所ですので、私の手を離してはいけませんよ」
「「はーい」」

シルフの注意に返事が二つ。
家を出てからカーリアはソフィアにべったりと引っ付いて離れなかった。
仲のいい姉妹のように腕を組んで歩く姿に、保護者一同顔がほころぶ。
広場の喧騒から少し外れた場所に本屋があった。
四階建ての建造物の一階、二階が本で埋め尽くされた非常に大きな本屋だ。
中に入ると紙とインクの匂いが濃い、奥には活版印刷機が見えるので、製本もしているのだろう。

「カーリア、新しい本を買ってあげよう。
おじいちゃんと一緒に見て回ろうかの？」
「姫も一緒にいくの！」
「カーリア、シルフ様は姫様から離れられないの。
仲良しになれたのはいいけど、ママ達の言うことも聞かなきゃだめよ？」
「…はぁい」
「さて、僕も久々に見て回ろうかなぁ。
民間の本も馬鹿にできないしね」

それじゃ後で、と、シルフの肩を叩いたエドゼルはカーリアをソフィアから引き離して奥に向かった。

名残惜しそうに手を伸ばすカーリアに、ソフィアは笑顔で手を振った。

「姫様も本を見て回りましょうか？」

「うん！」

店の中で何度も鉢合わせするのは気がひけるので、奥に行った彼らと別の方向から店内を見て回ることにした。

お世辞にも整理整頓が行き届いているは言えない陳列棚だが、大まかにジャンル分けはされているようだった。

歴史、音楽、工芸と流し見しながら、二人は二階へ続く階段を上がる。

二階に上がってすぐにソフィアはある一角に興味を惹かれたのか、シルフの手を取って足早に向かう。

そこには勇者に関する本をまとめたコーナーがあった。

勇者の英雄譚であったり、武器に関するものであったり、中には彼らの旅の間の食事をまとめたものまで、勇者という一ジャンルだけでもこれだけの本が書けるのかと感心

してしまう。

ソフィアが手にとった本、印刷に手間の掛かるフルカラーの絵本である。

なるほど、これは子供の興味を惹くのも納得がいく、装丁にも丁寧な刺繍が施されている。

絵本と言っても片面が絵、もう片面は活字となっていて、幼児向けとは言い難かったが、まだ文字を十分に理解できないソフィアはペラペラとページを捲る。

あるページでは笑顔になったり、あるページでは眉間にシワを寄せたり、あるページでは悲しそうな顔をしたり、目まぐるしく変わる彼女の表情にシルフは思わず吹き出してしまいそうになった。

「姫様、その本がお気に召しましたか?」

「うん、かわいい…」

「では、その本を私からプレゼント致しましょう」

シルフを見上げる彼女の表情は最初に市場に出かけると伝えた時と同等に光り輝く笑顔になった。

この笑顔を見れただけで、シルフは顔が綻んでしまう。

たとえ、本にぶら下がっている値札に銀貨五枚と書かれていてもである。
銀貨五枚あれば、このクラフト区でそこそこのホテルの個室に食事付きで泊まれてしまう値段なのである。

「シルフ、読んでくれる？」
「ええ、もちろん」
「やったぁ!!」
「姫様、本屋という場所ではお静かに…」
「あ、ごめんなさい」

口元に一本指を立てたシルフの仕草を、満面の笑顔で真似る彼女だった。

―――

「はい、ありがとね。
えー、銀貨五枚、頂戴しますよ」
「姫様、これをご主人に」

シルフは財布から取り出した銀貨五枚をソフィアに手渡す。
「え？姫？」と眼鏡を上げた店主はシルフの隣にいるソフィアを見て、仰天した。
「ソ、ソッ、ソフィア王女様!?」
「はっ、はい！」

店主の仰天にさらに仰天したソフィアは思わず後ずさった。

「ご店主、本日はお忍びで参りましたので、どうか」
「め、滅相もございません！
王女様のお付きの方からお代を頂戴するなど恐れ多いこと…！」
「では、ソフィア王女の社会勉強ということで、どうか受け取って頂けませんでしょうか」
「さ、左様でございますか…。
では、ソフィア王女様、恐れながら…頂戴致します」
「は、はい…」

金を渡すだけで緊張しまくっている二人だが、ソフィアは差し出された店主の手に片手を添え、丁寧に渡す。

そんな所作さえも感動したのか、店主は真新しい革袋に銀貨を入れて、呼びつけた女房に金庫に入れるよう言いつけた。

革製のブックカバーやら色とりどりの栞などをおまけにプレゼントされ、シルフは一旦断ろうとしたが、ソフィアが喜んでいるので、快く受け取ることにした。

―――

ハバー家一行が本屋の買い物を終えるまで、シルフとソフィアは本屋の外で待つことにした。

途中、通りかかった女道化師が薬草の花の押し花と花蜜の飴を手渡してきた、どうやら薬の宣伝を請け負っているらしい。

残念ながら食品をそのままソフィアに食べさせる訳には行かなかったので、飴はシルフが預かった。

ソフィアが上機嫌に本と栞と押し花を眺めていると、ハバー家一行が店から出てき

た。

「すまんすまん、遅くなったわい」
「ひめー！」
「カーリアちゃッ、はわぁ!?」

店から出るなり抱きついてきたカーリアをソフィアは素っ頓狂な声で受け止めた。
頬ずりまでされているソフィアは嬉しそうだが、若干困惑もしていて視線でシルフに助けを求めている。
抱きつくのはちょっと控えてもらおうかなぁ、とシルフが考えていると、「姫様が転んだらどうするの！」とルイーサが嗜めてくれた。

「ごめんね、姫…」
「いいんだよ、カーリアちゃん」

しゅんとしているカーリアの髪を撫でるソフィア、ますます仲のいい姉妹のようだ。

「それにしてもエドゼル様、ずいぶん買い込みましたね…」
「僕の分はないよ、娘のが二冊、それ以外はルイーサが買ったんだ」

１０冊以上の本が入った麻の手提げバックを持たされているエドゼルの横で嬉しそうにルイーサが語りだす。

「大収穫ですわ、シルフ様。
魔法食物を使ったお料理のレシピに、最新の魔法薬学書。
精神疾患に対する魔法医学の最新論文も興味深いですわ」
「それ、全部読むの？」
「当然ですわ。
この子に栄養満点の食事を作ってあげたいし。
お勉強も教えてあげたいもの」
「ふう、歴代屈指の大神官様も寿退社ってところかい？」
「あら、教会を離れるつもりはありませんわ。
私を必要としてくれる人がいる限り、一生を捧げる所存ですもの」
「まったく誇らしいよ。

…そんなところを愛しているんだけどね」
「ふふ…、あなたが時々見せるそういうキザっぽいところを愛しているの」
「おーおー、そういうのは家に帰ってからにせんかい」

あわや口づけを交わそうとする二人をアルドが制止する。
真っ赤な顔を本で隠すソフィアと対象的にそんな両親の姿をニコニコと眺めるカーリアを見て、愛情表現豊かなのは親譲りか、とシルフは一人納得した。
エドゼルがソフィアの持っている本に気づいて口を開いた。

「おや、姫様も本を買ったのですか？」
「うん、シルフが買ってくれた」
「あら、どんな本ですの？」
「勇者様の物語？」

語尾が疑問符のソフィアは追加の説明をシルフに催促する。

「英雄バルドリック様たちの冒険物語です。

三大ルーンの加護を受けてから魔王オアマンドを討伐した後の、この国の創生初期まで書かれているようです」
「かなり詳しく書かれているね。
だからそんなに分厚いのか」
「まぁ、素晴らしい本を選ばれましたね、姫様。
でも少し難しそうな本ですわね」
「シルフがね、読んでくれるって」
「いいなー、姫」
「カーリアの本はおじいちゃんが読んであげよう」
「やった！」

本の話題が尽きたところで、エドゼルが腹を叩いて進言した。

「さてと、そろそろ腹が減ったね。
どこかで食事しよう！
カーリア、何が食べたい？」
「お肉！」

カーリアが即答したところで、シルフはソフィアの希望を聞いた

「姫様は何を召し上がりたいですか？」
「私もお肉がいいなぁ…」
「肉かぁ、いいねっ、ガッツリ行きたい気分だ」
「普段から油こいものばかり食べているではありませんか…。
いつまでも若くないのですから、控えて下さいね、あなた」
「何言ってるんだい。
僕ら軍人は体力が資本さ、食べれる時に食べないと」
「そんなこと言って…、最近は内勤ばかりでしょう？
前よりお腹が出てきていますわよ」
「パパ太ったぁ！」
「ぐっ…、面目ない…」

エドゼルの腹に抱きつくカーリアを見て、ソフィアはシルフの腹をさすりはじめた。

「シルフは…やせてる…」
「そ、そうでしょうか…？」
「もっと太らなきゃだめだよ？」
「姫様の言うとおりじゃ。
　お主は華奢で女子のような面じゃからな。
　もっと食って鍛えよ若僧よ」
「精進致します…」

　シルフは苦笑いを受けべながら髪を掻いた。

「場所はどこにしようか？」
「屋台は嫌ですわ。
　人数も多いし、ゆっくり食事ができる場所がいいわね」
「なら、〝フライハイト〟っていうステーキ屋が大通りの方にあるんだ。
　美味い肉を出すって隊の中でも評判だよ。
　亜人の店員の女の子が可愛いって言ってたなぁ…痛ったぁ！！」

ルイーサに脛を蹴り上げられたエドゼルは痛む足を抱えて跳ね上がり、こめかみに青筋を立てた彼女は「おほほ、嫌ですわおおげさに」と彼の肩を叩いてみせた。
カーリアはそんなエドゼルに人差し指を向けてキャッキャッと笑っている。

「さ、あなた。
いつまでも痛がってないで、参りましょう」
「ルイーサ！　手加減を考えてよ！」

中央広場からクラフト区の関所まで長くまっすぐ伸びる大通りからやや奥まったところにその店はあった。
黄色レンガの平屋、オレンジの看板にフライハイトの店名、ただしドアに準備中と書かれた木の板がぶら下がっている。

「あれ、閉まってるのかな」

エドゼルが木製のドアに開けられた覗き窓から店内を見ようとしたところで、ドアが開いた。
現れたのはオレンジのワンピースに白いエプロン姿の犬耳の女性だった。
エプロンの背後が盛り上がっているのはしっぽがあるからだろう
なるほど美人だ、どちらかと言えば護りたくなるタイプだ、とルイーサに悟られないようエドゼルは心の中で感想を述べる。

「あ、いらっしゃいませ。
ごめんなさい、ちょっと開店に時間が掛かってしまっていて。
もう開けますから、中でお待ち下さい」
「あら、一番乗りなんて幸運ですわ」
「お姉さんかわいー！」
「あら、ありがとう。
可愛いお嬢様」

ルイーサとカーリアがエドゼルの横を抜けて店の中に入っていく。
すれ違いざまにルイーサに視線を向けられたエドゼルは、なるほど、僕の心中はお見

通しか、と寒気を覚えたのはきっと季節が冬だからじゃない。
松の壁に洒落たテーブルと椅子、部屋の中央にある円筒形のガラスを被せた魔法石が店内を明るく照らし、店内はモダンな雰囲気で統一されているが、シンプルで大きめな薪ストーブの上に置かれた料理鍋で作られているスープがどこか家庭的な良さを醸し出している。
壁棚に飾られる高価な葡萄酒や蒸留酒を見るに、客層もそれなりに懐に余裕のある人間が多いのだろう。
先程のウェイトレスが持ってきた子供椅子にソフィアとカーリアを隣同士で座らせ、両脇にシルフとルイーサが座った。

「ほっほ、年寄りにはちと洒落っ気が強すぎかのう」
「綺麗なお店ね、全然煙たくなくて嬉しいわ」
「ありがとうございます！
こちらメニューです」
「ありがとう。
子供に食べさせるなら何がいいかしら？」
「子牛のリブロースがおすすめです。

香辛料は控えめで、ソースは果物をベースにしているので食べやすいですよ」

ガチャリと店の出入り口が開いた。

反射的に「いらっしゃいませ」と言ったウェイトレスの言葉が尻込みになる。

入店してきた三人の男、刈り込んだ髪、汚れた服、手入れの行き届いていない毛皮のマント、全員が首筋から頬に達する入れ墨をしていて、虚ろな鋭い目つきはひと目で堅気でないとわかった。

シルフたち男衆はその三人を一瞥した後、互いに視線を合わせて認識を確認する。

首の入れ墨で分かる、奴隷商だ。

この国において、奴隷商が出入りできる店は契約で取り決めがされており、それ以外の店の利用は禁止されている。

ただ、この店が契約のされた店なのか否か、推測するなら間違いなく契約されていないだろうが、確信が持てない以上対処はできない。

「空いているお席にどうぞ…」とウェイトレスが声を掛けて、ルイーサにメニューの説明を再開しようとした。

「おい、注文」

「えっ…、すみません、少しお待ち…」
「ガキの注文が終わるまでなんか待てるかよ！　さっさと来いや!!」

男の怒号が店内に響く。
ソフィアとカーリアがビクリと身体を跳ねらせ、不安な表情で互いの手を握る。
鋭い視線をしたルイーサが席を立ち上がろうとするのをエドゼルが止め、抗議の視線を向ける彼女に「様子をみよう」と耳打ちする。

「私達はもう少し考えますので、お先に伺って下さい」

シルフがウェイトレスに進言すると、「すみません…」と一言残し、おずおずと男たちの方へ向かい、テーブルの上にメニューを差し出す。
三人はひどく機嫌が悪いのか、メニューを見ることなく、ぶっきらぼうに注文をつける。

「適当に摘めるもん持ってこい、あと酒」
「…すみません、昼間はお酒をお出ししてないんです」

「ああ？　与太ぬかしてんじゃねぇぞ、あそこに酒がおいてあるだろが!!」
「すみません…、マスターの決めごとなので…」

男の一人が席から立ち上がり椅子を勢いよく蹴飛ばすと、首を鳴らしながらウェイトレスに詰め寄る。
恐怖に縮こまる彼女を残りの男達が下卑たニヤケ顔で愉快そうに嘲笑う。

「なんの騒ぎだ？」

開け放されたままの店の出入り口からコックコートを着た青年が入ってきた。
食材で膨らんだ麻袋と格好から、この店の店主だろう。
青年は早足に奴隷商とウェイトレスの間に割り込むと、奴隷商の男と正面から睨み合う。

「お前ら奴隷商だろ？」
「だったらなんだ？」
「俺の店に奴隷商の出入りを許した覚えはねぇ、出てけ」

「あぁ!?　なんだぁてめぇ…、客に対してその口の聞き方は!?」
「俺の言うことが聞こえなかったのか？　出てけ！」
「マ、マスター…」
「アメリー、衛兵を呼んでこい」

アメリーと呼ばれたウェイトレスは小さく頷くと出入り口へ向かおうとしたが、残りの奴隷商たちに阻まれる。
「行かせるわけねぇだろ」と彼女の前に立った奴隷商が何かに気づいたように口を開いた。
「おい、この女、見覚えがあるぜぇ。
何ヶ月か前にここに下ろした商品だよ！　亜人だったからよく覚えてるぜ。
確か、胸に前の飼い主の焼印があったなぁ…へへへ」

男は彼女のワンピースの襟に手をかけると、力任せ引き千切った。
顕になった胸元には大小複数の焼き鏝の跡があった。
悲鳴を上げた彼女は両腕で身体を抱えるように前を隠して、床に座り込む。

これに激昂した店主が男に掴みかかったが、別の男に羽交い締めあい、動きを封じられる。

「てめぇぇ!!」

「はっ、俺らが奴隷商だからなんだってんだ。
おめぇも奴隷をこき使ってんじゃねぇか！
おらどうした？　殴りかかってこいよ？
…こねぇならこっちからいくぞ！　おらぁ!!」

羽交い締めにした青年の腹部に向けて拳を突き入れ、苦痛で前かがみになった顔面をさらに数発横殴りにされる。
ぐったりとした店主の口からダラリと血が零れ落ち、糸を引いた、

「マスタぁ!!」
「非礼への詫びとしてこの酒はもらっていくぜぇ」
「マスターの店のものに触るな！　このケダモノ！」

壁棚の酒に手をかけた男の頬に向けて、アメリーが張り手を見舞う。
逆上した男は彼女の髪を鷲掴みにすると、泣き腫らした目で睨みつける彼女の顔面に向けて右手を振り上げた。
――――が、その腕は振り下ろされることなく、別の者の手によって掴み留められた。

「もう、そのへんにしておきなさい」

後ろを振り向いた男の視線の先に、シルフが立っていた。
笑みはなく、男の血走った目と対象的に冷ややかな視線を向けている。
興味がシルフに移った男は、アメリーの髪から手を離すと、代わりにシルフの襟を掴み上げる。
その光景に不安を感じたソフィアが席を立ち上がろうとしたところを、ルイーサが抱きとめた。
「シルフが危ない」と懇願する彼女に「大丈夫ですよ、姫様」と彼女の髪を優しく撫でた。
「よぉ…、ガキ。
妙な正義感で首を突っ込むと、寿命を縮めるぜ…？」

「あなた方が騒ぐせいでいつまでも食事を出して頂けないので。
どうかこの辺で立ち去っては頂けないでしょうか？」
「てめぇ、ぶち殺すぞ!!」
「…少し、落ち着きなさい」

シルフが左手の人差し指を男の前に出すと、小さく魔法の印を描く。
途端に足元がおぼつかなくなった男は、なんの受け身をとることなく床に昏倒した。
魔法などとは縁のない二人の奴隷商は、少年のような優男に仲間が何をされたか理解出来ず、店主の青年を放り出して腰に下げた短刀を抜きだした。
暴挙に出た男を止めようにも、刃物を見せられては何も出来ず、店主もウェイトレスのアメリーもその場を離れてただ見ていることしかできない。

「…まだ続けるのなら外にしましょう。
お店に迷惑が掛かります」
「うるせぇ…殺されてぇか…」
「どうぞご自由に、お出来になるのでしたら」

出入り口から一歩外に出たシルフは軽く挑発するように〝こっちにこい〟と指で招いてみせた。
まんまと挑発に乗った二人はあとを追うように店の外に出ていった。

「やばいぞ、あの兄ちゃん殺されちまう」
「マスター、動いては駄目！　口からすごい血が出てる…」
「俺のことはいい！　早く衛兵を呼んでこねーと!!」

「あやつなら案ずることはないぞ、若いの」
「傷口を見せて…、口の中を切っただけね」

アルド、ルイーサ、ソフィアとカーリアの手を取るエドゼルが店主とアメリーの元に駆け寄る。
ルイーサは自身の口元に手を当て、治癒の呪文を呟くと店主の顔を両手で包み込む。
たちまち出血がとまり、痛みが引いていく感覚に店主は驚愕の表情を浮かべ、僅かな腫れだけとなった自分の顔を何度も触った。

「こいつは…魔法ってやつか、初めて受けた」
「その治癒魔法の掛け方、他人にやられると妬けるなぁ…」
「ふふ、今夜、いくらでもして差し上げますわ」
「それは楽しみだなぁ…、僕は一応シルフ君を見てくるから、姫様達のことは頼んだよ」

外へ行こうとするエドゼルを、やはり不安に駆られたソフィアが追いかけようとするが、アルドに止められる。

「大丈夫じゃ、姫様。
あなた様の護衛はこの国一番の剣士ですぞ」
「でも…でもっ」
「どうかわしの孫と一緒にいてくだされ。
思いの外、怖がりのようでの」

アルドの言葉に、ソフィアはカーリアに視線を向ける。
アルドにしがみついて目をキュっと瞑り震える彼女を見て、肩にそっと寄り添う。
自分だって不安だし、恐怖もあるが、初めて出来た大切な友人が震える姿は見ている

だけで痛ましかった。

「姫、あったかい…」

「そうかな?」

「うん、なんか不思議な感じ…すごく落ち着く…」

「ほほう…」

アルドの目に、ソフィアの身体から光り輝くオーラが見える。

そのオーラは絹の布ようにカーリアを包みこみ、彼女の負の感情を拭い去りながら天井へと上る。

それは長年魔法と向き合い続けてきたアルドも見たことのない、魔法なのかすらもわからない。

彼には、その幼い少女が女神のように見えてならなかった。

フライハイトの前はシルフ達を中心に人だかりが出来ていた。
理由は当然、短剣を持った男二人と素手の男が大立ち回りを繰り広げるからだ。
ステゴロならば喧嘩を扇動する輩もいるかもしれないが、凶器を振りかざしているような状況では囃し立てる者はおらず、全員衛兵の到着を願いながら悲劇が起こらないことを願っていた。
――――が、いざ始まってみれば、ものの数秒で男の一人は鳩尾に受けた拳打で昏倒し、シルフによって短剣を取り上げられてしまう。
残る一人はシルフの手に短剣が渡ったことで踏み込むことができず、大粒の脂汗を流しながらジリジリと距離を推し量っている。
男に視線を向けることなく、奪った短剣をしばし手の中で弄んでいたシルフだが、興味が失せたように短剣を投げ捨てた。

「もう止めにしなさい。
捕まればよくて鞭打ち、最悪、斬指刑になるかもしれませんよ」
「うるせぇ！　…舐めてんじゃねぇぞ…っ」

悪党というのはとことん哀れな生き物である。

面子を死守することを最重要とし、力の差が歴然としていてもそれに立ち向かうこと美徳とするのだ。

この男の頭の中はプライドを守るために虚勢を張り続けることに必死になっていた。

「死ねオラァ!!」

両手で握った短剣を前に突き出し、一直線に突進する。

――――が、期待した手応えは得られず、視界が一回転して全身が地面へと叩きつけられる。

取りこぼした短剣はシルフの足で遠くへ払い除けられた。

受け身も取らずに拗じられた腕が筋断裂を起こし激痛と痺れにその場にうずくまりながら、更に去勢を張り続ける男は脅しの言葉を口にしはじめた。

「てめぇ…、こんな真似してタダで済むと思ってんのか…。

へへ、俺はしつけぇからよ…」

「……」

「育ちの良さそうなガキを二人も連れてるなぁ…ははっ。

ああいうガキが好きな金持ちの変態が俺らの客には大勢いるのよ…。
外に連れ出す時は気をつけるこった…じゃねぇと　グッ!!」

シルフは男の首を掴むと乱暴に振り回しながら頭上へ上げる。
男は掴まれている腕を振り払おうとするが鋼のような腕はびくとしない。

「よく聞け、小悪党」

ゆらりと向けられるシルフの視線は冷たく、底冷えするような声が男の恐怖心を駆り立てる。

「お前らの飼い主は分かってる。
お前らを見る限り、碌な躾もできてないんだろう」
「いっ…いき…がっ…」
「お前らの商売からすれば、この国は大事な得意先のはずだ。
その国でこんな狼藉を働いたことを知れば、お前らの飼い主はどんな罰をお前らに下すんだろうな。

衛兵に突き出すよりも面白いことになりそうだが、どうする？」
「ひ…ひ…も、もうしわけ…」
「それとも、このまま首をへし折ってやろうか？」
「そこまでだシルフ君、手を離しなさい」
エドゼルの手が男の首を掴むシルフの手首に掛かる。
しかし、力は緩められることなく、シルフは男の顔を見上げ続ける。
「僕の言うことが聞けないのかい？　これは命令だよ。
それとも何かい？　僕の娘や姫様の前で人を殺めるつもりかい？
――そんなことは絶対に許さないよ、すぐに手を離すんだ」
「…申し訳ございません」
シルフの手から解放された男は咳き込み絶え絶えの呼吸を整えながら、その場から逃げようとするのをシルフによって店内で眠らされた男を抱えたアルドが阻んだ。

「ほれ、忘れ物じゃ。
逃げるんじゃったら、一緒に持っていった方が身のためじゃぞ？」
「ひぃッ…へ…へいっ」

気絶した男を抱えながら三人は人混みを掻き分けて消えていった。

「シルフ君、あんな小物の挑発に血を上らせるなんて君らしくないな」
「お見苦しい真似を。
お許しください」
「ん、まぁ、大事にならなかったからよかったかな。
僕の娘のためにやったことでもあるし」
「まったくシルフよ、お前も精進が足らんな！」

「これはシルフ隊長！　他の皆様もご一緒で」
「なんかあったんスか？」

普段着姿のヘルベルトとマーディンがシルフたちに駆け寄ってきた。

「君たちか、いやなに、ちょっとした揉め事さ。
君たちはどうしてここに？」
「ヘルベルト先輩と昼飯にいこうと、このステーキ屋に来たっス」
「道中でなにやら騒ぎが起こってるので慌てて駆けつけたのです」
「そうか、ならちょうどいい、話は中でしよう。
僕たちもここで昼食を摂ろうと思ってね」

面々はフライハイトの店内へと入っていく。
コックコートで前を隠したアメリーが心配そうに出迎えた。

「あの…、大丈夫ですか？　お怪我は？」
「ほっほ、大丈夫じゃ、厄介者は追い払ったぞい、この優男がな」
「ありがとうございます！　なんとお礼を言っていいか…」
「お気になさらず。
そちらこそお怪我は？」
「こちらの僧侶様が治療をして下さいました」

「女の子に傷が残ったら大変ですもの、ふふ」

「あ、あの！」

店主の青年が膝に手を付きながら恭しく頭を下げる。

「その…、そんだご迷惑を…。
それと、とてもお偉い方だとお聞きしまして、ご無礼を…」
「よいよい、頭を上げよ、若いの。
わしらはただの客として参っただけじゃ。
それより飯じゃ、まったくとんだ邪魔が入ったわい」
「も、もちろんでさ！
アメリー、裏に行って着替えてこい、店開けるぞ！」
「はい！　マスター！」

―――

「ゆるせんッス！」
「でけぇ声だすんじゃない、落ち着け」
マーディンが大きめに切り分けた肉を口で頬張りながらがなり立てると、他の客が何事かと視線を向ける。
ヘルベルトが軽く頭をはたくと「すんませんっ」と謝ったものの、表情は険しいままで苛立ちは隠せないようだった。
話を聞いて苛立っているのはマーディンだけではない、この国で堂々と狼藉を働いた馬鹿共への怒りはヘルベルトも同じのようで、肉を切り分けていたナイフを止めてシルフに話しかける。

「しかし、その奴隷商、いかがしましょう。
入れ墨からいってオークを筆頭にしている奴隷商で間違いないと思いますが」
「まぁ、私は何もせずともいいかと」
「奴隷取引はわしらの領分じゃないからの。
担当官に面倒を掛けるのも悪いしの、尋問で呼び出しを食らうのも勘弁じゃ」

シルフはソフィアのステーキを彼女の一口に合うように切り分けながら言葉を返す

と、それをフォローするようにアルドが口を開く。
衛兵に捕まれば尋問に当事者として呼び出される、せっかくの休日を邪魔されるのは勘弁というのが、当事者である彼らの本音だ。
そう返されてしまってはその場にいなかったヘルベルトとマーディンには口出しできない。
話を聞けば、シルフが存分に痛めつけたとのことなので、そのことと引き換えにこの苛立ちは抑えることにした。

「失礼します！　デザートをお持ちしました！」

ウェイトレスのアメリーが盆の上にグラスにもられたアイスにクッキーなどをあしらえたパフェを二つ乗せて現れた。
ソフィアとカーリアの前に置かれると、彼女たちの口から歓喜の声が上がる。
思わず手を伸ばそうとするカーリアに「ごはんを食べ終わってからね」ルイーサが言い聞かせた。

「お店からのせめてものお詫びです。

本当にありがとうございました！
他の皆様にも一品サービスさせて頂きたいのですが、如何ですか？」
「いいのか？　当事者でもない俺らまで馳走になっても…」
「そうっスよ、俺ら後から来ただけっスよ？」
「もちろんです！　ご遠慮なさらないで下さい！」

アメリーの満面の笑顔に思わずマーディンの鼻の下が下がる。
どうでもいいが妹系が好みの彼はアメリーがドストライクのようで他の接客にあくせく働く彼女を目で追い続けていた。
結局、アルドが熱い茶を要望した以外、全員コーヒーを頼むことに決まった。
注文を聞いてその場を去ろうとするアメリーをルイーサが呼び止める。

「アメリーさん、ちょっといいかしら？」
「あ、はい！　なんでしょうか？」

密着するように身体を寄せ、彼女だけに声が聞こえるようにそっと耳打ちする。

「その、胸の焼印のことなのだけれど…。
教会へいらっしゃい、時間は掛かるけど治癒することができるわ」
「え…、あ…」
「辛い過去を少しでも忘れることができるなら、私達に手伝わせてね」

目尻に溜まる涙を幾度も袖で拭い、喉につかえながら何度も感謝の言葉を口にするアメリーをルイーサが抱きしめる。
しばらくして落ち着いた彼女は、笑顔で接客に戻っていった。
その後、しばし談笑を楽しんだ一行は、食事を終えると店の前で別れた。
別れ際、シルフはマーディンへ城門前でソフィアが傷を癒やした件で他言無用の相談をした。
満腹になった彼はすっかり忘れてしまっていたが、シルフの相談には二つ返事で了解した。
もっとも、彼も一人の軍人としてあのような出来事を吹聴するような馬鹿な真似をする気は一切なかったが、シルフに「奇跡に近い」と言われたことで王女への尊敬の念が一層に深まったのだった。

「美味しい夕食をありがとうございました」

シルフは食卓を囲むハバー一家に向けて手を組みながら頭を下げる。
白いクロスの敷かれたテーブルに並べれた料理は賑やかな食卓の跡を示すように、ほとんどが空になっていた。

「ふふ、今日買った本にあるレシピを早速試してみたの。
お口に合ったようで何よりですわ」
「ええ、ルイーサ様のスープも大変美味しかったです。
身体が温まりました。」
「君が厨房に立つのも、コックはすっかり慣れたようだね」
「母親ですもの。
コックが作る料理も良いけれど、やっぱり自分の料理を娘に食べさせてあげたいわ」
「うむ、今日の酒は格別に美味いの。
やはり夕食は大勢で囲むのが一番じゃ」

「お父様、あまり深酒はしないで下さいましね」
「まぁ、いいじゃないか、付き合いますよ、お義父さん」

エドゼルがアルドのゴブレットに上等な葡萄酒を注ぐ。
「すまんな」と言いながらアルドは一気に中身を胃に流し込んだ。
その光景にルイーサは再び口を挟みそうになるが、半ば諦めたのか、黙って食器を片付けはじめた。
先程から屋敷の奥で楽しそうなソフィアとカーリアの声が聞こえてくる。
夕食を早く食べ終えた二人は邸宅の奥で仲良く遊んでいるようだった。
ソフィアを無事城へ送り届ける任を負うシルフは酒を遠慮して、楽しそうな彼女たちの声に耳を傾ける。

「姫様のあんなに楽しそうに笑う声を聞くのは、初めてかもしれません。
カーリア様というご友人が出来たこと、心から感謝致します」
「それはこちらとて同じじゃ。
身分は違えど、これからも良い付き合いを続けていこうぞ」
「でも、そろそろいい時間かな。

お開きにしようか」
「では、姫様を呼んで参ります」

――――

「ダメ！　姫はあたしともっと遊ぶの！」

ソフィアの帰宅を告げられたカーリアが引き止めに掛かるが、ルイーサが抱き寄せ、涙ながらに猛抗議する彼女をあやしはじめる。

「カーリア、シルフ様を困らせてはダメ。
あなたももう寝る時間でしょう？」
「でも…でも…、やだぁッ！」

先程まで楽しそうに笑っていたソフィアの表情も暗く、上目遣いでシルフに懇願する。

「シルフ、もう帰らないとダメ…？」
「姫様もお城に帰ってお休みにならねばなりません」
「そっか…」

説得が通らないと諦めたソフィアはカーリアを抱きしめながら別れを告げる。

「…また遊びに来てくれる？」
「うん、今度はカーリアちゃんをお城に呼ぶ！
シルフ、いいかな？」
「ええ、女王陛下にお願いしてみましょう」

「じゃあ、ポエットにもお別れしよう？」

カーリアが名前を呼ぶと、白銀の毛並みと碧眼の子犬が彼女の足元に駆け寄り、床に伏せた。
それを見たシルフはひと目でそれが〝犬〟ではないことに気づく。

「これは、フェンリルの子供ですか」
「ああ、フェンリル一族の長から一人預かっていての。
知能が高く、魔力も強い、いずれ魔闘士として正式に軍で起用できないか検討中での。
まだ生まれて一週間足らずじゃ、人の姿にもなれはせん」

ソフィアはポエットと呼ばれたフェンリルの子供を抱き上げ別れの言葉を掛ける。
ポエットも切なげな声を上げながら彼女の顔を何度も舐めた。

「バイバイ、ポエット
みんなもさようなら」

シルフと手をつなぎながら玄関口でハバー一家にお辞儀をする。
アルド、エドゼル、ルイーサ、ポエットを抱いたカーリア、執事長のアデルが見送りに出る
「バイバイ姫！　絶対また遊ぼうね！」
「姫様、本日はご一緒できて光栄でした。
道中お気をつけて、シルフ君がいるから安心だろうけど」

「ほっほ、姫様、孫と仲良くしてくれて感謝するぞい。
また招待するからの」
「姫様、夜は冷えますから、暖かくして下さいね」
「またのお越しをお待ち致しております」
「本日はお世話になりました。
それでは失礼致します」

最後にシルフが別れの言葉を告げ、玄関の扉は閉じられた。

住宅に掛けられたランタンの光と、魔法石の街灯が照らす夜道を手を繋ぎながらシルフとカーリアが歩く。
別れの時こそ暗くなってしまったソフィアの表情も、今日一日の楽しかった思い出がよみがえり笑顔になる。

「姫様、今日は楽しかったですか？」
「すっごく楽しかった！　カーリアちゃんとまた遊びたいなぁ」
「姫様がいい子にしていれば、すぐにまた会えますよ」
「本当!?」
「ええ、お約束します」

両手を上げて喜ぶ彼女に冷たい冬の風が吹く。
立ち止まって身を強張らせた彼女はシルフに身を寄せる。

「シルフ、寒い…、抱っこして？」
「…仰せのままに」

小さな少女を抱き上げて、寒さから守るように抱きしめる。
しばらく無言で歩き続けていると、いつの間にか彼女の寝息が聞こえてきた。
腕の中の温もりがシルフの心まで温めてくれる。
彼がようやく手に入れた心の安寧を離さないように、ようやく手に入れた幸せを零さないように、彼はゆっくりと歩き続けるのだった。

出会い　―　完

4 ― 風を操りし者たち①

エアンストは机に積み上がる請求書や伝票と格闘していた。

六畳ほどの執務室に使い古された事務机と椅子、整理整頓された本棚には使い込まれた軍事学、薬学、魔法学の本が収められ、部屋の四隅や窓枠にはホコリひとつ被っていない。

来客用に新調された艶のある黒色の革張りソファーとダークウォルナットのテーブルが古めかしい室内ではかえって浮いて見えた。

自分のものは古くていい、他人に使わせるものはちょっと良い物を、という本来のこの部屋の主であるシルフの性格がよく現れている。

エアンストが事務作業のほとんどを請け負い始めてからは、シルフは大抵どこかへ出掛けているし、ここで来客を迎えるときはエアンストに一声掛けてくれるので、彼がこの執務室を使っていても誰も文句など言わないのだ。

とにかく、今はこの大量の書類を片付けねばならない、帳簿をつけ終えたもの、シルフのサインが必要なものをテキパキと仕分けしていく。

コンツコンツコンツ！

なかなか空かないトイレのドアに催促するが如くノックされると、許しを得もせずに勢いよく一人の女が執務室に入室してきた。

「おっはよーございます！　あなたの心のオアシス～！　アレッサちゃんどぅえ～っす！」

燃えるような赤毛にグリーンの瞳、革とチェーンメイルで仕立てられた軽装鎧の下に派手なイエローのシャツを着込んだ女が何やら胸とウェストを強調するポーズにピースサインとウインクをかましながら登場した。

頭痛を抑えるようにエアンストは目頭をつまみ上げ、どう突っ込めばいいのか思案し、思案した結果、突っ込まないことに決めた。

「…何の用だ？」

「あっれ～？　シルフ隊長は？　今日はいると思ったのに！」

「…今日は市民の受け入れの日って、昨日連絡をしたはずだが？」

「あっはー、なるほど、じゃあスカウトに行ってるんだね！」

「なぁんだー」と意気消沈した彼女は来客用のソファーにどっぷりと座ったが、「そこは上座だ、正面に座れ」と席替えさせられる。

「うっさいなー、いいじゃん！　誰もいないんだから！」
「そういうことの積み重ねが、本番でボロを出す原因になるんだ。
　これからは俺達も上の方々に会うことが多くなる、軍人としての品位を落とすような真似は許さんぞ」
「はいはーい！　ぶ～…」

　大きなため息を付きながら、エアンストは事務作業を進めつつ、アレッサと会話を続ける。

「皆の朝の訓練は終わったのか？」
「うん、今は朝食食べて休憩させてるよ」
「そうか、すまんな」
「え、なにが？」
「いや…、戦闘訓練の指南役のほとんどをお前に押し付けているからな」

「仕方ないよぉー、エアンストはシルフ隊長の秘書になってるし、カールは魔法薬学、ヨハンは付呪が得意でしょー。
私、学がないからさー、身体張るくらいしか貢献できないし…」
「そんな卑下する必要は断じてないぞ」

苦笑いを浮かべながら頬を掻く彼女に、エアンストはペンを走らせる手を止め柔らかな眼差しを向けながら語りかける。

「お前は人を指導することに関して天賦の才がある。
俺やカール、ヨハンが指導すると皆萎縮してしまうからな。
実働部隊二十人を達成できたのも、お前の貢献が圧倒的に大きい、感謝しているよ」
「えっ、そっ、そっかなー、えへへー」
「あとは、もう少し礼節を学んでくれればな」
「そこはー…、がんばる！」

パッと立ち上がった彼女は書類の積まれた机に身を乗り出してエアンストに笑顔を向ける、思わず急接近する彼女の顔に、エアンストの頬に赤みがさす。

「…とにかくだ。
俺はこの書類の片付けと今日納品される荷の受け入れ準備をしなきゃならん。
カールとヨハンは付呪用のマナ鉱石や魔法薬の材料の仕入れに行ってもらってる。
引き続き訓練の方、頼んだぞ」
「まっかせて！
そっかぁ、ついに私たちの正式装備が届くのか―」

アレッサは胸の高鳴りを抑えるように、落ち着きなく執務室内を右往左往する。

「三年かぁ―、長かったなぁー。
キッツイ思いもしたけどさ、やっと報われるんだぁー」
「これからが本番さ。
俺たち初期メンバーの四人は隊長補佐としてシルフ隊長とレンジャーを支えていくんだ」
「あははっ、最初の頃に一番隊長に楯突いてたのあんたじゃん！」
「ふん、魔闘士のつまらんプライドなどとうに捨てたさ！」

「はいはい！　頼りにしてるよ！　エアンスト！」

――――

上記のやり取りから二ヶ月ほど遡る。

魔闘士士官の宿舎の一室、魔闘士第二師団所属　エドゼル・ハバー大尉の執務室だ。

下期の編成で大尉へ昇進したエドゼルは引き続き魔法剣技部隊（レンジャー）の後見人を務めている。

彼が座る立派な桃花心木（マホガニー）の机の前では整列休めの姿勢でシルフが佇んでいた。

エドゼルは黙って一枚の書類を見つめていたが、視線をシルフに向け、軍人の顔でなく、一人の友人として笑顔で書類を渡した。

「おめでとう、シルフ君。

今期のレンジャーへの予算、君の要望通りに可決されたよ」

「はっ、ありがとうございます」

シルフの手元に渡った書類には承認の印と軍務大臣のサインが記されていた。

「それと、エアンスト君、アレッサ君、カール君、ヨハン君の四名も正式に隊長補佐として役職が認可されたから。
ちゃんと手当がつくからね」
「重ね重ね、ありがとうございます」
「で、君の役職手当だけど、どうする？」
「今までどおり、隊の運営資金に入れて下さい」
「欲がないね、ほんと」

エドゼルは紐でまとめられた書類の束を手に取る。
今回の予算編成に伴いシルフから提出された、彼らレンジャーが三年間積み上げた〝戦果〟の記録だ。
部隊の発足当初、シルフとたった四人という一分隊にも満たない彼らにはまともな予算が充てられなかった。
国からは最低限の運営金のみの支給、彼らの給金に至っては魔闘士部隊の運営費から捻出される始末で、まともな装備も買えなければ、日々の演習場は他の部隊に頼み込み間借りし、本来同胞である魔闘士たちからも疎まれた結果、宿舎も一般兵科の宿舎を借

りることでやり過ごしてきた。
魔闘士のお荷物、落ちぶれ連中、大道芸人、魔闘士の左遷先…、魔闘士という大部隊におけるヒエラルキーの最底辺からのスタートとなった。

そんな状況を変えるべく、彼らは傭兵ギルドと接触を図った。

ヘルト連合王国が同盟国との交わす約定のひとつに軍事的な支援、領土の守護がある。
同盟国の領土や民の命・財産を脅かされる事態に陥った場合、要請を受けてヘルト連合王国は武力を提供するというものだ。
ただし、要請は国を通した陳情という形を取る必要があり、ヘルト連合王国の常備軍を動かす以上は時間も莫大な費用も掛かる。
そのため、ヘルトでは傭兵ギルドと呼ばれる民間軍事組織を作り、そこに所属する傭兵（所属する者の多くは〝冒険者〟と自称するが）に自国、他国からの依頼を問わず、荒事の解決を委託している。
ギルド長をはじめとするギルドの運営はヘルトの人間で組織されているが、そこに所属する傭兵については自国民以外も広く受け入れている。

性質上、受ける任においては何らかの武力を行使する必要がある案件が大半のため、集まる人間は荒くれ者が多い。

そして、与えるものは報奨金のみであり、それ以外の一切を保証しない、依頼を受けた末に命を落とそうとも。

しかし、闇雲に死傷者数を積み上げることによる傭兵の不足をギルド側も懸念し、敵の規模・性質、地形、気候から独自の難易度を設定し、推薦されるパーティ構成、装備、食料・医薬品の情報などを提供している。

もちろん、それらを取り揃えている店へのロードマップも提供することで、他のギルドとの相互扶助を行っている。

こうした運営をする中で起きる問題、それは難易度が高すぎる案件、または難易度に関係なく、誰もやりたがらない案件がいつまでも残るというものだ。

所詮は金で動く傭兵である、リスクが大きすぎるか割に合わない案件は受けないことが大半だ。

中には武勲を上げたい辺境の騎士や増額される報奨金に目がくらんだ者が身の丈に合わない仕事を選び、そして死ぬことで、張り出される依頼書に書かれた死者数を表す星マークが増え、ますます誰も受けなくなる。

なお悪いことに、そうした案件がヘルト連合王国自身の問題であり、民の生活に影響

が大きい場合、常備軍が解決に動く必要がある。

そうして駆り出される部隊の大半は一般兵科の兵士であり、殉職する者も多かった。

レンジャーの創設メンバーである五人はそれら〝ワケあり〟案件を片っ端から解決していった、それも無償である。

交換条件として依頼者にシルフたちを紹介すること、つまりはコネづくりへの協力だ。

依頼者は別のギルドに所属する商人であったり、大学等の関係者が多かった。

そうでなくとも、無償で問題を解決すればレンジャーを通して軍への評判が上がるので、軍内部での彼らの地位の土台作りとなる。

そうして少しずつ戦果を積み上げ、ギルドからの信用とコネを作ると同時に、軍内部の地位を向上させていく。

中でも本件において最も危険にさらされる一般兵科の兵士たちから大いに感謝されることは、肩身の狭い彼らのストレス軽減につながった。

こうして部隊の設立から三年が経ったレンジャーは多額の運営資金獲得に至ったのだ。

いまエドゼルが手にとっているのは傭兵ギルドから発行される「依頼達成証明書」の

束である。

「すごいね、こんなやり方、僕も思いつかなかったよ。
げっ、水妖(ドラウナー)の肝臓採取…？　依頼は魔法大学院からか…。
剰えひどい臭いのするあの化物の腹を掻っ捌いたのかい…。
部下のみんなは大丈夫だったの？」
「生け捕りにするところまでは問題ありませんでした。
私が腹を割いたところ、皆嘔吐してしまいまして…」
「だろうね、僕でも三日は食欲が戻らないね。
そうか、発注する装備品が全部特注品なのに価格を低く抑えられたのも、このコネがあったからか」
「ギルドの皆様には感謝の言葉もありません」
「この戦果だけでも、僕は上に君たちの予算を押し通すことができた。
でも、二つ返事で承認されたのは〝コレ〟が決めてかな」

エドゼルは引き出しから一枚の便箋を出して机に置く。
ある領主からの陳情の文と印が押されている。

山岳にある人気のない街道に現れた大所帯の山賊団の討伐依頼だ。
護衛連れの大商隊を襲い、皆殺しにした上に物資を根こそぎ奪っていく。
あまりの手練ぶりから何かを感じ取った領主はヘルト連合王国へ討伐と背景の調査を依頼した。
ヘルト連合王国の騎士団に依頼者と縁の深い士官がいたため、本件は騎士団によって進められることとなった。
商隊を装い山賊団をおびき出したまではよかったが、山岳戦における練度の高さから不意打ちに合い、部隊に重傷者を出してしまった結果、やむを得ず撤退する事態となった。
騎士団の失態が公衆に広まるのを恐れ、手を拱いていた上層部に対して、エドゼルは本件をレンジャーへ依頼し解決させた。
調べてみれば、山賊団たちは依頼者と対立関係にある貴族の私兵で、貿易の盛んな依頼者の領土への嫌がらせとして行ったものだった。
依頼者である領主はこの事実を相手貴族に突きつけ、自国の後ろ盾であるヘルト連合王国の軍事力を背景に交渉した結果、多額の賠償金を獲得したのだった。
無論、本件の手柄は騎士団ということになっている。

「僕は生死を問わないと言ったんだけどね。
まさか全員捕縛してくるなんて驚いたよ」
「その頃には私たちも十人を超える部隊となっていましたから」
「これで魔闘士は騎士の連中に貸しができた。
真意はわからないが僕は異例の速さで大尉へ昇格。
ん～、このネタは当分使えるな―」

くつくつと笑いながら、エドゼルは背もたれに身体を沈めこむ。

「さて、僕の要件は終わりさ。
大金が入るんだ、隊のみんなに美味いものでもたらふく食べさせて上げればいい」
「ええ、そのつもりです」
「うん、君たちのさらなる活躍に期待している！」

シルフは書類を手にして、ドアの前で一礼すると、エドゼルの部屋を出る。
ドアの先にはエアンスト、アレッサ、カール、ヨハンの四人が壁際で期待に胸を膨らませながら待機していた。

シルフはエドゼルから受け取った予算申請書を突き出して、ＯＫサインをしてみせる。

場所も憚らず、彼らから歓声が上がったのだった。

5 ― 風を操りし者たち②

俺はエアンスト・ナウマン、魔法大学を卒業してすぐに魔闘士団に入隊したばかりの魔闘士の新兵だ。

まぁ、新兵と言っても大学の士官課程を修了しているからな、はじめから階級は曹長で部下もいる。

こうまでして軍人になろうとした理由はただひとつ、親を楽にさせてやりたいからだ。

俺の親は母親も父親も元奴隷だった。

別にそれに負い目を感じているわけじゃない、この国で〝市民〟となって立派に働き、税も納めている。

この国はちゃんと仕事を用意してくれたし、自由も保障してくれた、しかし生活が裕福であるか貧しいか、そればかりはどうにもならない。

親父は炭鉱で働き、お袋は縫製工場で働いて必死に俺を育ててくれた。

俺は子供のころから苦労している親の背中を見て育った。

そんな俺にできることは必死に勉強することだけだった。

国が面倒を見てくれるのは義務教育まで、俺はそこで必死に勉強して、特待生として大学へ進み、一番になれなくてもそれなりの成績を残した。
最初は俺が軍人になるのは親父もお袋も反対した。
いくらこの国が大きくても、何があるかわからない、それを両親は心配したんだ。
俺は必死で説得した、今まで育ててくれた恩を返したい、楽にさせて上げたいってな。
そんなものは必要ないって言ってくれたけど、最後は「お前の好きな人生を生きろ」と親父が言って話は終わった。
幸い、俺には魔法の才があった。
魔法使いであることは、俺にとって最大の幸運だと思う。
技能職である魔闘士は一般兵科と比べても給金がいい、家柄がものをいう騎士団とも違い努力と才能で上を目指せる。
俺は絶対に出世して、親に良い暮らしをさせてやりたいんだ。
入隊してから二ヶ月ほど過ぎ、季節は夏に入りつつある。
学生の時から軍隊という気質には慣れているから、他の同期よりは環境に慣れるのは早かったが、初っ端からの激しい訓練は否応なしに兵士としての自覚が芽生えた。
…実は、俺は今、不安を抱えている。
上官であるエドゼル・ハバー中尉から呼び出しを受けたからだ。

何かまずいことをしたのか、と考えてみたが思い当たることはなにもない。
自分で言うのもなんだが、俺はかなり生真面目な方だと思う、軍隊の規範は厳守しているし、プライベートでも自己管理に余念はない。
咎められるようなことはひとつもない、はずだ。
いかんな、こんなことで心を乱されては。
俺はいずれ、あの人を超えることを目標にしているのだから。
エドゼル・ハバー中尉、単なる一兵卒から現在の階級まで上り詰めた叩き上げだ。
飄々とする態度と言動、それでいて人の心を掌握し、見透かすような目で見る、正直、俺の苦手とするタイプだ。
そんな彼は結婚して去年は子供も生まれたんだっけか。
ノックをし、相手の許しを待って、彼の執務室のドアを開ける。
俺の知らない男が二人、その対面にハバー中尉が座っていた。

「エアンスト・ナウマン、中尉のご命令により参りました」
「うん、忙しいところ悪いね、座ってくれ、あともうひとり来る予定だから」

俺は金髪で長髪の男の隣に座る。

呼び出されていたのは俺だけじゃないのか、ますます何の要件なのか分からんな。
しばらく無言のまま座っていると、廊下をドタバタと走る音と同時に、勢いよくドアがノックされた。
ハバー中尉が入室を促す。
扉が開くと上がった息を整えながら赤毛の女が入ってきた。
「ア、アレッサ・ベーデカー…中尉のご命令により参りました!」
出頭が遅れ申し訳ありません!」
「いや、まだ命令時刻になってないよ。
忙しいところ悪いね、さぁ、座って」

アレッサと呼ばれる女は俺の右隣に座った。
「コーヒーでも飲む?」とハバー中尉が言ったが、アレッサを除いて俺たち男衆は遠慮した。
高級そうな豆の香りが部屋に漂う、彼の趣味なのか、これまた洒落たデザインのカップを二つ持ち出し、コーヒーを注ぐと片方をアレッサに差し出した。
彼女はテーブルに積まれた角砂糖をドバドバ入れる、人の嗜好にケチを付けたくはな

いがいかがなものかと思った。

「さて、全員揃ったし、本題に入ろうか。
どんな話し方にせよ混乱するだろうから、単刀直入に言う。
君たちには魔闘士の新設部隊に入ってもらう」

新設部隊という言葉に一同驚いた、もちろん俺もだ。
アレッサは飲んでいたコーヒーがまずいところに入ったのかむせている。

「ふむ、まぁ驚くだろうね。
エアンスト君、僕ら魔闘士の基本的役割はなんだろう?」
「はっ、前衛の防御陣形の背後より破壊魔法による火力支援を行うことであります」
「うん、模範的回答だ。
前衛を担うのが歩兵、後衛には魔闘士、あとは回復なんかができる治癒士がいれば最小の布陣ができるわけだが。
僕が考えているのはこれらの役割を一人で担うことができる兵士を育てることなのさ」

そこまで言って、彼はコーヒーに口をつけた。
後衛も前衛も担うことができる兵士？
確かに、俺たち魔闘士だって基本的な白兵戦の訓練はするが、それは前線が崩されて接敵された時の応戦のために学んでいるに過ぎない。
全てを一人でっていうのは、一体どういうことだ？
そう考えていると、一番左端に座っている、ブラウン色のおかっぱ頭の男が口を開いた。

「ハバー中尉、私もカールも魔闘士の中では補給部隊です。
中尉が仰るような部隊では、やや実力不足かと存じますが…」
「ヨハン君、そこだよ！
君の専門分野はマナ鉱石の加工だろ、カール君は魔法薬学が専門だ。
僕が考える部隊は専業化されているあらゆる分野を扱える、それこそ単騎での任務遂行が可能な万能技能兵（スペシャリスト）を育てることなのさ。
部隊の名前はそうだな…、魔法剣技部隊…、レンジャーなんてどうだろう!?」

ハバー中尉が大げさな手振りで熱く語る。
言っていることはなんとなくわかった、そしてこれはチャンスなのではないか？
全く新しい新設部隊の創設メンバー、ここで武勲を上げれば一気に出世への道が開ける。
そう考えれば俄然やる気になってきたぞ。
ここで、コーヒーを飲み終えたらしいアレッサが遠慮がちに手を挙げる。

「あのー…」
「なんだい？　アレッサ君」
「中尉の仰ることはわかったのですが…、私たちだけで…その兵士になるというのは…」
「ふふ、わかっているよ、ちゃんと手本になる人間は用意してある。
新しい部隊で君たちの上官になる人間だ、呼んでくるから待っていてくれ」

ハバー中尉はなぜか意気揚々と部屋を出ていった。
あの人はあんなキャラなのか？
にしても、俺達の上官になる人か…、面識はあるんだろうか。
話を聞くに、白兵戦にも精通している魔闘士ということになるが、そんな器用な人間

は心当たりがないが…。
何やら扉の向こうで言い争いが聞こえる…、ドアが一旦開きかけたかと思えばすぐに閉められた。
しばらく様子を見ていると、今度こそしっかり開かれたドアからハバー中尉と…子供？　が入ってきた。

「やぁ、遅れてすまないね…はぁはぁ…。
彼が無駄な抵抗をするものだから…」
「抵抗ではありません、抗議をしているのです、ハバー殿」
「ハバー殿じゃない、君も軍人になったんだ。
私のことはハバー中尉と呼べ、君の上官だぞ」
「籍を置くだけで良いといったではありませんか！」
「そうでもしないと、こんな無茶な話、君も了承しなかっただろう!?」
「無茶な話だと自覚しているんですか!?　それは驚きです!!」

俺たちの視線はハバー中尉と口論している彼に向けられる。
黒髪に黒い瞳、声変わりしているので男だと分かるが、顔はどっちともつかない中性

的で整っている方だ。
歳は十五、六くらいか、この国では十六歳で成人と扱われるが、ちょうどそれくらいだ。
背も高くない、女性であるアレッサと大差ないな。
にしても燕尾服が全く似合っていない…、完全に服に着せられている感じだ。
しばらく呆然と二人のやり取りを眺めていたが、例の彼が諦めたように対面の椅子に座る。
ため息を付きながらハバー中尉も彼の隣に腰掛けた。

「ふう、見苦しいところを見せたね。
彼が新しい部隊の隊長を務めるシルフ君だ」
「…シルフと申します、以後お見知りおきを」

この…少年が俺たちの隊長!?
今の俺は、きっととんでもない表情になっているだろう。
だって、思っても見てくれ、目の前の男は年端もいかない少年だぞ。
そんな彼を隊長だなんて、そんな…。

そんな俺の表情を見たのか、それとも全員俺と同じ表情になっていたのか分からんが、ハバー中尉が口を開く。

「まぁ、困惑するのは当然だね。
彼には、彼の持つ全ての技術を君たちに習得させるよう命じてある。
いいね、シルフ君」
「ここまできたらお受けする他ないでしょう。
受ける以上は責任を持って任を遂行致します。
ただ、この職務に付く間も城へは出向かせて頂きますが、宜しいでしょうか？」
「それは君の裁量で自由にしたまえ。
ただし、隊の活動に支障がないように、常にこっちを優先して行動すること、いいね？」
「承知いたしました」
「では、後は若いもの同士、ごゆっくり」

そう言って席を立ったハバー中尉は手をひらひらとさせながら執務室を出ていった。
その後姿を、頬を膨らませ睨みつけるようにシルフ殿が見ている。

なんとも少女的な仕草だが、中性的で幼い顔立ちのせいか、妙に似合っている。
俺達と向き直ったシルフ殿だが、しばし沈黙の時が流れる。
聞きたいことは山程あるが、どこから切り出せばいいか…、そう思っているとアレッサが先陣を切った。

「あのー…、シルフさんはいつから軍隊に入ったんですか？」
「…昨日です」
「それまでは何をしてたんです？」
「王城にて、ヴェリーヌ女王陛下とソフィア王女の身辺のお世話を。
使用人のようなことをしておりました」
「わぁ、それってすごい！」

こんな状況でも物怖じしないアレッサ、肝が座っているのか天然なのか？
しかし使用人だと、ますます戦闘からはかけ離れている。
だがアレッサが喋りはじめたおかげで俺も発言しやすくなった、思い切って聞いてみよう。

「シルフ殿」
「はい」
「貴殿はどのような経緯でここへ？」
「…一年と少し前に…、流れ着きました」
「では奴隷であったと？」
「いえ、そういうわけでは…」
「それ以前にどこかの国で従軍のご経験は？」
「…いえ、ありません」
「では、戦闘のご経験は？」
「まぁ、それなりに…」
「それはいつ!?　どのような相手だったのか!?」

勢いあまって声を荒げた俺の脇を金髪の男、カールが肘でつく。
しまった…、噛み合わない会話につい熱くなってしまった。
シルフ殿の視線が伏し目がちになる、場を取り繕おうと頭を働かせているうちに彼が口を開く。

「私は、魔物も人も大勢殺してきました。
殺した人間の数も顔も覚えてはいません。
こんな話で皆さんの信用を得られるのなら、詳しくお話しますが、如何ですか？」
「い、いや…結構だ…」

事もなげに話す彼だが、その目から伝わる冷たい視線を受けると背中に嫌な汗が滲み出る。
この凄みが、彼の言葉が嘘偽りのないものだと理解させる。
こんな言葉を紡ぐこの少年は一体どのような人生を歩んできたのか、俺の浅い人生経験では想像ができない。
また、沈黙が続く。
こんな雰囲気にしてしまったのは俺のせいだ、何か…、何か場を和ませる話をしなくては…。
しかし、またしても沈黙を破ったのはアレッサだった。

「もー、みんなさぁ…、初めて会ったならしなきゃいけないことあるでしょー？
自己紹介！　あたしはあんたたちのこと全然しらないんだけど!?」

ビシリと俺達を指差すアレッサ。
ああ、それもそうだ、俺もここにいるメンバーのことはしらない、話の流れで名前だけ分かっているだけだ。
アレッサの言葉に一番左端に座るヨハンが咳払いの後に口を開いた。
「ヨハン・アルトマンと申します。
魔闘士第三師団所属でマナ鉱石の管理を担当していました。
専門は付呪魔法ですが、破壊魔法も扱えます。
どうぞ宜しくお願い致します」
ヨハン、おとなしそうな見た目通りの礼儀正しい自己紹介だ。
続いて金髪長髪の男、カールが続く。
「カール・グレーデン、ヨハンと同じ第三師団所属でこいつとは同期だ。
専門は薬学。普通の薬も作れるが、変性魔法が得意だから錬金薬も調合できるぜ。
もちろん破壊魔法も使える。　よろしくな！」

カール、長い髪を掻き上げながらキザっぽい挨拶をする。
当ててやろう、こいつは絶対に女好きだ。
この順番でいくと、次は俺だな。

「エアンスト・ナウマンだ。
第二師団所属、後方火力部隊にいたから破壊魔法が専門だ。
よろしく頼む」

む…、前の二人が破壊魔法以外の専門分野を持っているせいか、見劣りしている気がするが…。
まぁ、虚勢を張っても仕方ないしな。
次はアレッサだが、何笑ってるんだ？

「ふふ…ふっふふふ…。
よく聞け男どもよ…、あたしはアレッサ・ベーデカー！
男だらけのむさ苦しい軍隊で健気に咲く一輪の花！

あぁ…狼のような男達の視線が痛いわ！
あ、私も第一師団の火力部隊にいたので破壊魔法が専門でーす！
趣味はお酒を飲むこと！　よっろしくぅ！」

なんていうハチャメチャは自己紹介だ…。
が、げんなりしているのは俺だけのようで、カールもヨハンも笑っている。
おっと、シルフ殿も笑っている、笑顔は年相応だな。
まぁ、彼女のおかげで場の空気は和んだから、感謝だな。
あとはシルフ隊長のみだが…。

「ふふ、皆さん、自己紹介ありがとうございました。
先程の問答でお分かりだと思いますが、シルフと申します。
姓は持ち合わせていないので、シルフと呼んで下さい」

姓がない、か…。
やはり出自に謎の多い人のようだ。

「はいはいはーい！
シルフさんの特技と趣味を教えて下さい！」
「特技…ですか。
まぁ、剣術は我流ですが得意と言えば得意ですね…。
ヨハンさんとカールさんの専門の付呪と変性も心得はあります。
王城での仕事が趣味のようになっていました」
「ほほう！」
「ホントですか!?」
「王城で働いていた時の話、もっと聞きたぁ～い！」

付呪と変性魔法の心得があるという話にカールとヨハンが飛びつき、アレッサが話をぐいぐい引っ張っていく。
あれ、俺、蚊帳の外だ…。
くそ、こういう軽口にはいつもうまく溶け込めないんだよな。
こんな時、自分の真面目すぎる性格が恨めしい。
いや、だが、俺は確かめなきゃならない、この人は俺たちの隊長に相応(ふさわ)しい人なのか。
談笑する彼らを眺めつつ、話が途切れた所を見計らって俺は立ち上がった。

「シルフ殿、頼みたいことがある」
「はい、なんでしょう?」
「俺と手合わせ願いたい。
ハバー中尉の人選を疑っているわけでも、あなたを見くびっているわけでもないが、俺達の上官になる人がどれほど強いのか、俺は確かめたいんだ」

シルフ殿が俺の目をじっと見つめる。
周りから止められるかと思ったが、他のやつも俺の言ったことに興味があるのか、口を挟もうとはしない。
シルフ殿は椅子から立ち上がると、穏やかに微笑んで応えてくれた。
「お受け致しましょう」

6 ― 風を操りし者たち③

俺は砂利で固められ雑草の生えていない練兵場に立つ。
手には両刃剣を模した木剣、照りつける日差しは暑いが、吹き付ける風には春の残り香が混じり、顔に滲む汗を心地よく拭ってくれる。
正面には燕尾服の背広を脱ぎ、高級な綿花のシャツになった少年が立つ。
俺も軍服の上着を脱ぎ、両足の腱を伸ばし、木剣を数回振って使い勝手を確かめる。
当然、真剣と違い軽い、普段の訓練で使う短刀と違って長さも違うが…、まぁ、それほど問題にはならないだろう。
歩兵の練兵場に魔闘士がいるのが珍しいのか、結構な数の一般兵が俺たちの様子を見ているな。
準備を整えた俺は剣をまっすぐに構え、号令を待つ。
シルフ殿は…全く剣を構えない。
両手を腰の下にぶら下げ、左手に持つ木剣も地面に向けている。
左利きという事実はどうでもよく、何の構えもしない態度に若干の憤りを覚える。
身構えるほどの相手でもないと思われているのか？

舐めるな、俺の近接戦闘の評価は同期のなかでも指折りだぞ。
苛立たしさの滲む目で、号令を務めるアレッサを睨む。
俺たちの間の不穏な空気を察しているのか、やや緊張の面持ちの彼女は、上段に構えた手を振り下ろした。

彼女の号令と同時にシルフ殿との距離を一気に詰める。
自分の持つ得物の適正範囲に彼の顔を捉える、防御の姿勢をしていない以上、俺の木剣は彼の顔面を打つ。
失望だ、ハバー中尉の人選には決定的な誤りがあった、それに巻き込まれた彼には同情を覚える。
彼には怪我をさせるだろうが、許せよ。
――彼の顔に向け、横薙ぎの一線を放った。
…は？
来るはずの手応えはなく俺の腕は空を切った…。
木剣の範囲に捉えたはずの彼はいつの間にか、その範囲から遙か後方に下がり俺を見ている。
――勝負は終わっていない。

即座に剣を構え直し、今の出来事を思い返す。
あの一瞬で後ろに後退したのか？
予備動作は見えなかった、足音も聞こえなかった…、幻惑魔法でも使ったのか？
まさか、そんな小手先で惑わされるほどやわな鍛え方はしていない、だが、まるで瞬間移動でもしたかのうように、大きく距離を空けられた。
俺と頭二つ分は身長差のある彼が、真剣な表情で俺を見ている。
どうやら、あんな大ぶりで彼を倒せると過信していた俺の方が、彼を見くびっていたようだ。
今度はゆっくり、ジリジリと彼との間合いを詰める。
彼はその場から一歩も動かない、こうも相手の出方がわからないと、こっちも戦略が立てられんが…。

次もあっさりと得物の適正範囲に彼を捉える、俺はいくつかの攻撃パターンを頭に入れた上で、剣を突き入れた。
その剣突をを彼はふわりとした動作で後方へ引くことで躱す、退避方法の理屈はわからんがこれは俺の想定範囲内だ。
余力を残した足を動かし、開いた間合いを一気に詰め、顔面を狙う一線を再度見舞う。

――彼が後方へ身を倒し、俺の一線は再度躱される。
だが、これで勝負あった。
このまま彼が背中から地面に倒れたところを上から叩けば俺の勝ちだ。
振り払った腕を構え直し、頭の後ろに構える。
目下に幼い彼の顔が俺を見上げる、この顔に剣を打ち下ろすという罪悪感は戦闘に高揚した今の俺には湧いてこない、今度こそ勝負が決まる。
――そう思ったんだよ。
俺の下顎に強烈な衝撃が走った。
突き上げられた俺の顔は、真っ青で雲ひとつ無い空を仰ぐ。
上下に揺さぶられた脳が頭蓋の中を暴れまわって、視界がぐにゃりと歪んだ。
薄れゆく意識の中、俺の視界に入ってきたのは、心配そうに俺を見る彼の顔だったんだ。

――

「あ、気がついた。　ねーえ！　エアンストが起きたよぉ!!」

うるさい…でかい声を出すな、頭に響く。
アレッサに呼ばれたヨハンとカールが俺の横たわるベッドに近づく。
漂う消毒液の匂い、医務室だな、ここは。
近寄ってきたやつらに、横たわったまま視線を向ける。

「俺は、どれくらい寝てた？」
「三時間くらいだな」

カールが応えた。
アレッサが心配げに俺を覗き込む。

「起きられそう？」
「ああ、まだ少し足が痺れるが…、よっこらせっ」

体を起こして、ベッドの縁に腰掛ける。
若干、頭がふらりとしたが大丈夫だ、顎を擦るが痛みはない、治癒士が回復魔法を掛けてくれたんだろう。

俺の正面に座るアレッサがからかうような笑みで話す。

「思いっきり負けちゃったね、かっこわるっ」

「黙れよ…、俺が勝つほうが逆におかしいだろ…。

シルフ殿は？」

「ちょっと前までいたよ。

ずっとあんたの看病してくれてたんだよ、明日お礼言いな？

今日はもう解散でいいって、明日、起床のラッパがなったら宿舎前に集合だってさ」

「そんな曖昧な時間でいいのか？」

「いいんじゃない？　あたしらもう魔闘士団の所属じゃないんだし？」

厳密には俺たちは魔闘士の分派だと思うが、隊長は彼だ、彼が良いというのならそれでいいのかもしれない。

明日のスケジュールは分かった、でも、俺ははっきりさせたいことがあるんだ

「なぁ、俺はなんで負けたんだ？

シルフ殿に…、どうやって俺は倒されたんだ？」

「ん～…、ここで反省会をやってもいいんどさぁ…」

アレッサがニヤけ顔でカールとヨハンに視線を送る。

二人も笑っているが、一体なんだ？

「親睦を深めるために、飲みに行くってのは…どう？」

「ぷはぁ…！　あー冷たいエールってなんでこんなに美味しいんだろー!!」

木製のジョッキをテーブル叩きつけ、豪快にアレッサが吠える。

俺たちはクラフト区の港湾を目の前にするパブで料理と酒を摘んでいる。

冷たい飲み物を出せる店っていうのは、実はそんなに多くない。

凍結魔法の魔法石とそれを動かせる魔法機械は高価だ。

ここら辺の公営湾岸倉庫か、羽振りの良い店か、それ以外は民営の貸し倉庫なんかを商売人達が間借りして利用している。

この店みたいに自前の醸造所と隣接しているところは醸造の過程で低温保存が必要だから設備が整っているんだろう、どうやらここはアレッサのお気に入りの店らしい。

「うるさい、黙って飲め」

「なぁによぉ…、シルフ隊長にコテンパンにやられたからって苛ついてるわけぇ？」

シルフ隊長か…、俺が負けたことで呼び方を変えたんだな。

戯言を吐く彼女に俺のしかめっ面を返して、俺もエールに口をつける。

うまい。目の前にあるオイルサーディンにフォークを突き立て一匹丸ごと口に入れる。

南部から輸入している香辛料と程よい塩加減、出す前に炙ったのか暖かくて芳醇な香りが口いっぱいに広がって夢心地だ。

俺は口に残る後味を洗い流すように更にエールをあおって、こいつらに問いただす。

「そろそろ教えてくれ、俺はなんで倒された？」

「風魔法（ウィント）だよ」

おかっぱのヨハンが手の中の石ころを弄(あそ)びながら俺の質問に答える。
俺はヨハンの言ってることに気が動転してしまって、半笑いで応える。

「風魔法って、帆船の推進力にするアレか!?」
「他に相手を吹き飛ばすくらいに使えるけど、あの人は風を全身に纏って、身体操作に使ってた。
倒れかけたシルフ隊長はそのまま翻って、君の顎を踵でカチ上げたのさ」

なんてこった…。
そんな超変則的なサマーソルトキックでやられちまったのか。
風魔法を体術に使うなんて、聞いたことないし、見たこと無い…見る前に俺は気絶させられたのか。
俺が頭を抱えて項垂れていると、ヨハンが手の中で弄(あそ)んでいた石をテーブルの上を転がせながら渡してきた。

「これは…マナ鉱石か？　付呪済みだな」
「君が気絶している間に俺たちはシルフ隊長といろいろ話していてな。

それは軍で扱う高純度のマナ鉱石だ。
含有するマナの純度が高いほど付呪師にも高い練度が要る。下手な付呪師じゃマナを魔法の元素に変換しきれなくて使い物にならなくしてしまうけど、あの人はいとも簡単にそれに風魔法の属性を付呪したんだ、付呪師としても十分通用するね」
「こいつは、どれくらい効力がある？」
「それ一つでフリゲート戦艦一隻を十日連続で航海させられるかな」

俺はパステルグリーンに輝く魔法石をシャンデリアの明かりに透かしてみる。
付呪やマナ鉱石に関して俺は素人だが、含まれるマナの大きさは魔法使いである俺にも分かる。
俺は自身のマナを魔法石と共鳴させる、パステルグリーンの輝きが増すと俺の前髪がふわりと風に揺れる。
ここでヨハンの手が伸びてきて、俺の手の中にあった魔法石を取り上げられた。

「バカッ！　店を吹き飛ばす気か!?」
「あ、ああ…、悪い…、そんな大事になるとは思わなかった」
「質の良い魔法石ってのは使用者にも制御する技術がいるんだ、じゃないと力が暴走す

る！」

ヨハンは呆れた顔で魔法石を服のポケットにしまい込んだ。
自分の軽率な行動に、急に気恥ずかしくなった俺は残ったエールを一気に流し込む。
酒が回って頭が軽くなり、思考が鈍る。
酒ってのは不思議なもんだよなぁ、酔うといろいろ喋りたくなっちまうもんだ。

「俺は…馬鹿だ…」
「ん～…？　なに、どうしたの～？」

テーブルに突っ伏した俺の頭をアレッサが指で突つき回す。
俺は彼女のいじりに気を止めず、湧き上がる感情のまま口に出す。

「大学でそれなりの成績残して…ヒック…。
軍に入って部下も出来て…いい気になってたんだ…うっぷ…。
井の中の蛙だよッ…世の中には俺よりすごいやつなんてたくさんいるんだッ」

ダメだ、喋っていたら涙が出てきた…。
ヨハンとカールは面倒臭そうに俺を見てる…アレッサは俺を見てケタケタ笑いながら俺の髪をくしゃくしゃ撫でる…そのエール何杯目だ？

「おーよしよし！　今夜はお姉さんがとことん付き合ってあげるわよ！」
「…お前、俺らと同い年だろ…」
「あたしは十六から軍にいるの、つまりあんたらより先輩ってこと。
まぁ、あんたらみたいなエリートじゃないけどね」
「…ちきしょう！」

俺はアレッサの飲みかけのエールをひったくって今夜何杯目かわからない一気飲みをする。
シルフ殿…いやシルフ隊長には勝負で負け、ヨハンとカールには知識で負け、アレッサにはキャリアで負けた！
焦点の定まらない目で不甲斐なさを嘆いていると、カールが革袋から小瓶を四つ取り出して配りだした。

「それ以上飲むなら、こいつも飲んどけ」
「なぁに？　これ？」

アレッサが訝しみながら小瓶を眺める。

「俺が調合した二日酔い止めの薬だ、肝機能を高めて代謝を促進する、効くぞ？」
「変なもの入ってないでしょうねぇ？」
「俺の家は薬屋だ、知ってるだろ？『グレーデン調合薬剤店』
そいつはそこで販売してるのと同じやつだ」
「うっそ、あんたあの店の息子なの!?　超お坊ちゃんじゃん！」
「店は兄貴が継ぐ、俺は三男坊だから自由に生きていけるのさ」

カールの実家の薬屋は卸問屋も兼ね、軍にも商品や材料を卸してる大商家だ。
適当に店の手伝いをしていても良い暮らしができたろうに、なんで軍に入ったんだ？
俺は素直に今思ったことを聞いてみた。

「俺はグレーデン一族の中でも唯一魔法が使えた。

ただの薬や魔法薬なら誰でも作れるが、魔法使いにしか作れない代物がある、錬金薬だ。
錬金薬は作用も副作用も術者の力量に左右される、薬効が安定しないから市販されない。
それを作れるのは魔法大学院か軍だけだ、だから手っ取り早く入れる軍隊を選んだのさ」

「それに軍人はモテるしな」と付け加えてカールは自分の薬を呷った。
なるほど、さしずめ錬金術師としての才能を発揮できるか試したいってところか。
俺もカールにならって、やつの薬を一気に飲む。
味は悪くない、ハーブの香りとシロップの甘みで飲みやすい、あの店で出してるものと同じなら効果もお墨付きだろう。
ヨハンとアレッサも続けて飲む、味に関しては俺と同じで問題ないようだ。

「へ～…錬金薬ねぇ、あたしあんまり詳しく無いんだけど、アレも錬金薬でしょ？
なんだっけ、そうそう、アンブロシア！むぐぅ！」

俺はかつて無いほど俊敏な動きで隣のアレッサの口を手で封じる。
すぐさま周囲の客の反応を見る…、大丈夫だ、こちらに視線を向ける者は一人もいない。
正面の二人を見る、顔が真っ青だ、もちろん俺も真っ青だろう。
引いた血の気と一緒に酔まで覚めそうだ。
アレッサが泣きそうな顔で「ごめん」と視線で訴えてくる。
俺はため息をついて、手を離した。
俺は厳しい顔で説き伏せる。

「そいつをこの国で口に出しちゃダメだ、アレッサ。
憲兵にでも聞かれたら何をされるかわからんぞッ」
「分かってる…、ごめん、酔っててつい…」

アンブロシア…、「悪魔の蜜」と異名を取る最悪の錬金薬だ。
〝一生分の幸福の前借り〟と言われるほど強烈な多幸感をもたらす代わりに〝悪魔の取り立て〟と言われるほど苛烈な副作用をもたらし、一度摂取すれば命が尽き果てるまで止めることが出来ないと言われている。

この国において製造や売買は極刑だ。
あまりの取締の徹底ぶりから口外することも憚れるほどの禁句となっている。
過去に幾度か汚染が広がり掛けたことがあり、人権を尊重するこの国においても製造者や密売人の死体を埠頭に吊るし、晒し者にしたらしい。
そんなヤバイ代物の名前をこんな大勢の人間がいるところで喋った彼女はしょんぼりと落ち込んでしまった。
なまじ明るい女性が悲しそうな顔になるのは、少々胸が痛いな…。
俺は沈んでしまった雰囲気をもとに戻すために大声で酒を注文する。
ナイスタイミングと言うべきか、時間がかかると言われていたターキーの丸焼きが酒と一緒に運ばれてきた。
照りと脂の乗った肉、漂うにんにくの香り、腹に詰め込まれた具材が食欲を掻き立てる。
俺は一番美味そうなもも肉を切り分けてアレッサの皿に乗っけてやる。
「ありがとう！」と満面の笑顔で言われて、彼女の曇った心情が晴れた安心感と一緒にちょっとだけ胸がドキリとした。
口や手が汚れることも厭わずに肉に頬張りつく彼女を、なぜだかな、ずっと見つめちまったんだ。

店はかきいれ時の時間帯を迎えたのか、海から帰ってきた男達が酒を交わし盛り上がりが増していく。

周りの熱気に当てられたように俺たちも存分に酒を飲み、食って楽しんだ。

すっかりデキ上がった俺達は四人で肩を組んで軍歌を歌いながら夜のクラフト区を練り歩く。

浴場でさっぱりして、宿舎のベッドに寝転がれば、ルームメイトの喧騒なんてそっちのけで俺は心地よい夢の中に落ちていった。

7　―　風を操りし者たち④

盛大な起床のラッパが鳴った。
条件反射で身体を跳ね上げ、二段ベッドの脇に立ち上がると、猛スピードで服を着替える。
他のルームメイトも競い合うように身支度を整える。
シーツを綺麗に畳み、部屋に一つしかない姿見鏡に代わる代わる姿を写し、服の乱れをチェックして部屋を出る。
井戸から水を汲んだら、外にずらりと並ぶ洗面台の列に並ぶ、自前のカミソリを使って大して濃くもない髭を剃り顔を洗い、宿舎の掃除を分担でこなして終わりだ。
まさか、ラッパが鳴ったら全部ほっぽりだして集合ではないだろう、いつもの日課くらいは終わらせねば。
あれだけしこたま酒を飲んだのに身体が軽い、カールの薬は効果抜群だったらしい。
洗面道具を置いて宿舎を出たところで、シルフ隊長と鉢合わせた、どうやら俺が一番らしい。

「おはようございます、エアンストさん」
「おはようございます、シルフど…シルフ隊長」
「呼び方は好きにしてもらって構いませんよ」

シルフ隊長は上官より挨拶の遅れた俺を叱ることもせずに、笑顔を向けてくれた。
俺は直立の敬礼をしたが、なんだかしっくりいっていない様子だな。
まぁ、彼は元より軍人ではないのだから、その辺の作法には疎いのだろう。
それより俺が気になるのはその格好だ。
上腕当(リアブレイス)やわき当(ベサギュー)、もも当(クウィス)など急所を革で保護し、フードの裏や首周りに鎖帷子を打ち込んであるが、極めて軽装な装備、そして腰に下げている曲刀。
そうだな……、うん、まるっきり暗殺者(アサシン)だ……。

「エアンストさん、体調は大丈夫ですか?」
「昨日のことでしたら、大丈夫です。
なんというか……、ご迷惑をお掛けしました」
「いいんですよ、そんなこと。
他の皆さんが来るまで待ちましょうか」

俺とシルフ隊長は宿舎の外壁に二人並んで中庭を眺める。
上官の怒鳴り声に責め立てられ走る連中の中に、俺たちをチラチラと見るやつらがいる。
こそこそ何やら喋りながら嘲笑っている……、ちっ、腹の立つ奴らだ。
しばらくすると残りの三人と合流した。
俺たち四人は、俺の号令でシルフ隊長の前に並び、敬礼する。

「あの……、皆さん楽にして頂けませんか……？」
「はっ、全体休め！」

俺の号令でザッという靴音を立て、腰の後ろで手を組む。
彼はまた困った顔で口を開いた。

「なんというか、もっと……こう、普通にして頂ければ……」
「我々軍人はこれが普通です、シルフ隊長」

俺の進言にもなんだか納得いっていない様子だ。

「そういう物ですかね、エアンストさん」

「シルフ隊長、部下に敬称を付けるのも不自然ですよ！

なんか他人行儀で距離感を感じちゃうので、呼び捨てにしてほしいでーす！」

「そうですか？　アレッサさ……、アレッサ？」

「そうそう、そんな感じで！」

「ふむ…、私は軍隊の規律に疎いので、そこらへんはエアンスト、あなたに任せます」

「はっ、了解致しました」

了解したはいいが、何をしようか……、とりあえず敬礼の仕方でもシルフ隊長に教えようかな。

ん？　アレッサが前に出てシルフ隊長の全身をまじまじと見ているぞ。

「シルフ隊長……、その格好は？」

「ああ、昔の装備に着替えてみたんですよ、一応軍人ですし。

変でしょうかね……？」

「ん～、変っていうか～……」

「――完全に暗殺者ですよね!!」

シルフ隊長が悲しそうな表情で項垂れた。

俺はとりあえず、アレッサの頭に拳を叩き込んだのだった。

――――――

朝食を終えた俺たちは何をしているかと言うと、錆だらけの刀剣をひたすら磨いている。

短剣以外に得物を持っていない俺たちのために、シルフ隊長が歩兵部隊に掛け合って倉庫に眠っていた型落ち品の片刃剣を譲ってもらったらしい。

俺たちには金が無い。

現時点で与えられている運営費では装備一式揃えるのは難しい。

防具だけはそれぞれの体格に合わせて作らねばならないので、後日防具屋で一番安いものを見繕うことにし、一番金の掛かる武器はこうして古い物を自分たちで手直しする

他ないだろう。
グリップ、鍔、鞘の状態は悪くないが、刀身は錆だらけで刃こぼれしている。
ひとまずバラして、重曹を溶かした熱湯に刀身を浸し、ヤスリで錆を落とす。
全体の地金が見えてきたら更に磨き上げ、ペダル式の回転砥石で刃を修正していく。
修正が終わったらシルフ隊長がグリップと鍔を嵌め直して、一振り出来上がったら鞘に収めて各自に渡していった。

「おいおい、魔闘士の新部隊とやらは鍛冶職人になりたいらしいぞ！」

俺たちの横を一団が立ち止まって、見下した視線を向ける。
第一師団所属のケレン曹長だ。
大学時代からの顔見知りだが、魔導系貴族の出身で金のない俺にさんざん突っ掛かってきていたな。
軍人のくせに締まりのない身体だ、脂ぎった顔に鼻の下に生えたちょび髭に妙な貫禄が出ている。
取り巻きに囲まれたやつはどうやら俺に用があるらしい、俺を執拗に凝視している。
俺は回転砥石を踏む足を止めて、やつと視線を合わせる。

「何か用か？」
「いや？　魔闘士の落ちこぼれ連中がどんなやつなのか拝みに来ただけさ」
「なぁ？」とやつは取り巻きに視線を向けると、取り巻き連中から嘲笑が湧き上がる。
シルフ隊長以外の俺たち四人の視線が険しいものになる。
中でも直情的なアレッサはすぐさま抗議の声を上げた。
「ちょっと！　あんたたちいきなりやって来てその言い草はなに!?」
思いがけない彼女の言葉に虚を突かれたような表情になったケレンだが、すぐに舐めるような視線で彼女の下から上を見て、歯を見せて嘲笑う。
「元第一師団所属のアレッサ・ベーデカー上等兵だね？
君のことはグラッツェル中尉から聞いているよ、とても優秀だって話じゃないか。
どうだい？　こんな掃き溜めにいないで僕の下に就かないか？　悪いようにはしないよ」

「はっ、お生憎様、あたしお腹に贅肉があって髭を生やしてる男は受け付けないの。
他を当たってもらえるかしら？」
「なんだと貴様!?」

アレッサの言葉に顔を赤くしたケレンがズカズカと彼女に詰め寄ろうとするが、その間にスッとシルフ隊長が割り込んだ。
邪魔が入ったことに更に立腹したやつは腰を落としてシルフ隊長の顔を睨みつける。

「なんだ貴様……、そこをどけ！」
「部下の無礼をお許し下さい。
私（わたくし）、魔法剣技隊を任されているシルフと申します。
ベーデカーにはよく言い聞かせますので、どうか気を収めては頂けないでしょうか？」

至極丁寧に対応するシルフ隊長だが、組み直したばかりの刀剣の刃を手で弄びながら物を言わぬ圧力を掛けているのが背後にいる俺たちにも伝わってくる。
彼から発せられる剣呑な空気にたじろぐケレンだが、引っ込みがつかないのか、とん

だ暴挙にでやがった。

「ペッ」

やつはシルフ隊長の顔面めがけて唾を吐きやがった。

ケレンはしてやったりと満足げな表情で取り巻きと去ろうとするが、俺はこの行為に我慢ならず、やつに組みかかろうとシルフ隊長の横を抜けようとしたが、彼に腕を掴まれてしまった。

「やめなさい、エアンスト」

「シルフ隊長！　しかし！　これではあんまりです！」

「いいから下がりなさい。

アレッサ、あなたもです」

俺が後ろを振り向くと、犬歯をむき出しにして怒りに肩を震わせるアレッサがヨハンとカールに抑え込まれていた。

彼女の剣幕に、逆に冷静になった俺は腰に下げていた手ぬぐいをシルフ隊長に渡す。

彼は笑顔で受け取って手ぬぐいでやつの汚い唾を拭い、アレッサに歩み寄った。

「アレッサ」

「シルフ隊長……、何で!?

こんなふざけたマネをされて！　なんで笑ってられるんですか!?」

「私たちは吹けば飛ぶほどの弱小部隊、何か問題を起こせば解散もありえます。

私はいいのです、また王城に帰って執事のマネごとに戻るだけ。

でも、軍に残るあなた達と魔法剣技隊を結成したハバー中尉はそうはいきません」

シルフ隊長は持っている刀剣を鞘に収めるとアレッサの手を取って刀剣を握り込ませた。

「あなたの剣です、しばらくの付き合いになるので大切にね。

怒りは力を生みますが、冷静さを失わせます、それは戦いに置いて死を意味するのです。

心の炎は絶やさずに、でも頭は冷静に……。

私からの最初の教えです」

シルフ隊長に宥められた彼女は怒りが悔し涙に変わったのか、手で顔を覆って静かに涙を流した。
彼は彼女を抱きしめ、赤い髪を撫でる。
俺たちはシルフ隊長という人がどういう人間なのか、この時、少しだけ解った気がした。

波乱の初日を堺に俺たちの訓練は始まった。
シルフ隊長いわく、彼の風魔法を使った体術の真髄は機動力にあるらしい。
騎馬隊を凌ぐほどの突撃力、剣術と破壊魔法を組み合わせたあらゆる状況にも対応できる攻撃手段。
これを体得するには体幹を鍛え上げることが絶対条件ということとなり、俺たちは朝から晩までとにかく走った。
初日の事件を鑑みて、魔闘士の練兵場を使うのは避け、リーベ区の関所を抜けて都市の外へ、そこからヘルトの広大な穀倉地帯の広がる平原を駆け抜ける。

最初は性差のあるアレッサに配慮する必要があるかと思ったが、俺のとんだ勘違いだ。
俺たちより従軍経験の長い彼女の方が、よほど訓練に適応するのが早かった。
さらに舌を巻いたのがシルフ隊長だ。
あの小さな体にどれだけのスタミナを蓄えているのか、彼の体力に底があるのかと疑うほどだ。
彼は常に俺たちの先頭を走り続けた。
普通は訓練についていけないと上官からの罵声を浴びせられるが、シルフ隊長はそういった指導は決してしなかった。
常に俺たち四人の様子に配慮しながら絶妙なタイミングで休憩を入れてくる。
筋肉痛に悲鳴を上げる俺たちの身体を労り、マッサージで苦痛を和らげてもくれた。
最初こそシルフ隊長に頼り切りだった俺達も、次第に互いの体調に気を配る余裕が生まれて、連帯感というものが培われてきた。
誰かがキツくなれば、誰かがそばに寄り添い、互いに励まし合う。
だがシルフ隊長曰く、そういった素養は訓練では身につきにくいらしい。
人は自分が辛くなると他人に気を配る余裕が生まれないのだそうだ。
「ハバー中尉があなた達を結成隊に任命した理由が分かった気がします」彼はある日そ

んなことを言っていた。
訓練以外の日常、とりわけ朝と夜には魔闘士の宿舎に戻らなければならないが、ここでの生活は最悪だった。
ケレンが何か根回しをしたのか、俺はルームメイトからハブられていた、他のメンバーも同じだった。
挨拶を無視され、時には私物を盗まれた。
俺、ヨハン、カールは同じ宿舎なので、食事は三人で摂ることができたが、アレッサはどうしているだろう。
彼女に問いただしたが、悲しい顔で「大丈夫」と言われたが、大丈夫なわけがない。
シルフ隊長に掛け合って、一日の食事は外で摂ることにした。
普段あまり立ち寄ることがないリーベ区は安い飯屋がひしめいている、肉体労働者向けの超高カロリーの食事も、激しい訓練に挑んでいる俺達には最高の栄養源だ。
こうして一ヶ月も過ぎた頃には、俺達の身体は見違えるようになった。
アレッサは「足が太くなっちゃたぁ～」と嘆いていたが、それほどに俺たちの下半身は強くなった。
次の訓練はより実践的なものとなった。
俺たちの訓練場は平原地帯から樹が鬱蒼と生い茂る森の中へ、そこでは多種多様な薬

草が生えている。

ここではカールが主導となって様々な薬草の知識を得ていった。

擦過傷に刷り込む初歩的な軟膏の作り方、鎮痛作用のある薬の調合、骨折への対処、予防疫学などの医学的なこと、どれも生存のために必要な知識だ。

生存自活ということで狩猟の方法、肉の調理法、飲水の確保、金策にもなる皮の加工法など、二週間も山にこもって何が何でも生き残る方法をシルフ隊長は教えてくれた。

〝イッカクウサギ〟という好戦的な魔物がおり、何匹かヨハンが弓で仕留めた、あいつはかなり弓のセンスがいい。

遊撃戦を想定したこの訓練では睡眠も制限された、睡眠不足と不十分な食事、そして疲労で情緒不安定になってきたメンバーを俺は必死で励ましていた。

メンバーのメンタル面のケアであまりシルフ隊長が口を出さなかったのは俺が気をしっかり保っていたのが理由と後で教えられた。

真夏の中、心身ともにボロボロとなって街へ戻ったときにはみんなして泣いてしまったな。

帰還して最初に食った麦粥の味は多分一生忘れない。

そしていよいよ剣術の訓練へ。

シルフ隊長が歩兵部隊に掛け合って、練兵場を間借りできた。
最初のうちは幾通りもの剣の型を反復練習する、それ以外は組手がメインとなった。
武装解除の方法、受け身のとり方、特に相手の力を利用して無力化させるというシルフ隊長独自の体術は興味深く、自分よりも体格の大きい相手を簡単に組み伏せることができる。
基礎体力の向上、剣術の型の練習、組みて、――――この一連の訓練をひたすら二ヶ月間繰り返して、季節は秋に差し掛かった。
この頃には魔法を体術に応用する訓練も同時に行うようになった。
風魔法（ヴィント）の属性を付呪した魔法石を補助用に鎧に縫込み、身体を風に乗せる練習を繰り返す。
魔法石はヨハンの得意分野だ、魔法石の制御方法は彼が主導して行った。
しかし、正直、この訓練が一番きつい。
巻き起こる疾風の中でバランスを取るのは至難の技だ、何度も何度も転び、体中生傷が絶えない。
それでも繰り返した受け身の練習と鍛えた体幹の成果か、徐々にコツを掴んでいった。
中でも頭一つ抜き出ていたのはアレッサだった。

アレッサは座った姿勢から風魔法で身体を浮かせる練習をしていた。
そんな時にこんなやり取りがあった。

「アレッサ」

シルフ隊長がアレッサの脇と両膝に手を入れ、いわゆるお姫様抱っこをした。

「いやん……、シルフ隊長だいたーん！」
「馬鹿なこと言ってないで意識を集中させなさい。
椅子に座っているイメージで。　私が補助しますので風を纏いなさい」
「え、うーん……、こうですか？」

俺たちはアレッサとシルフ隊長のやり取りを眺めていた。
彼らの周りに疾風が起き、服や髪が靡く。

「そうです、風の気流はあなたの足元から背中へ、上へ上へ上るようにするのです。
私の補助を少しずつ弱めます、自分の魔力で補いなさい」

「はいッ……」

風はどんどん強くなる、そして、シルフ隊長の両腕がアレッサから離れた。

不思議な光景だった。

重力に逆らって人が宙に浮く、赤髪を揺らしながら風に身を任せる彼女は、ある意味、妖精のような神秘性を帯びていた。

「すごい！　すごいよ！　みんな！

あたし、宙に浮いてる！　気持ちい～!!」

嬉しさのあまり気を抜いた彼女は頭から地面に落ちた。

「はびゃ！」という間の抜けた声を背に俺たちは各自訓練を続けた。

―――

俺たちの風魔法を使った体術は徐々に形となっていった。

森林での訓練では、風に身を乗せ、生い茂る樹木を掻き分け、枝から枝へと飛び移る。

どんなに高い木の上から飛び降りても風のクッションを作って無事に着地できる。
その頃には練兵場にてシルフ隊長との模擬戦も繰り返し行っていた。
コレが一般兵の連中に評判だ。
四人がかりでシルフ隊長を囲い込み、とうに素人の域を出た俺たちの剣技を、彼は簡単に捌いていく。
それも人間離れした体術で俺たちを圧倒していく、俺たちも負けじと身に付けた体術で応戦する、これがかなりの迫力がある、見物人が後を絶たない。
最初はノーガードで捌かれていたが、最近は彼も防御や崩しに木剣を使うようになってきた。
もちろん、そのときには例外なく俺たちは地面に叩き伏せられるのだが……。
こうした変化に俺たちは自分の成長を実感できたのだった。

そんな折、呼び出しを受けた俺たちはシルフ隊長の執務室に集合していた。
彼は事務仕事を片付けながら、のほほんと寛いでいる俺たちにこう言ってきた。

「そろそろ皆さんには実戦経験を積んで頂こうと思います」

俺たちは驚きと、実践という言葉に若干の恐怖があった。
俺は真剣な顔でシルフ隊長に問う
「実践というと……、どこかの紛争に参加するのですか？」
「まぁ、簡単に言うとそうなんですが、傭兵ギルドのギルド長と少し話をしていましてね」
傭兵ギルド……、民間の軍事組織だな。
自分を冒険者だと言って危険に身を突っ込んでいく命知らず共が集まる場所だ。
ああ、俺はなんとなく察しがついた。
「ひとまず、これから傭兵ギルドの酒場へ出向きます。
軍服ではなく普段着で構いませんよ、準備が整ったらここに戻ってきて下さい」
そう言って彼は手元の事務作業に向き直った。
まだ話の見えていない三人は首を傾げていたが、準備のために部屋を後にした。